



俳

俳諧古今抄

石川俵屋



伊地知文庫
文庫20
349

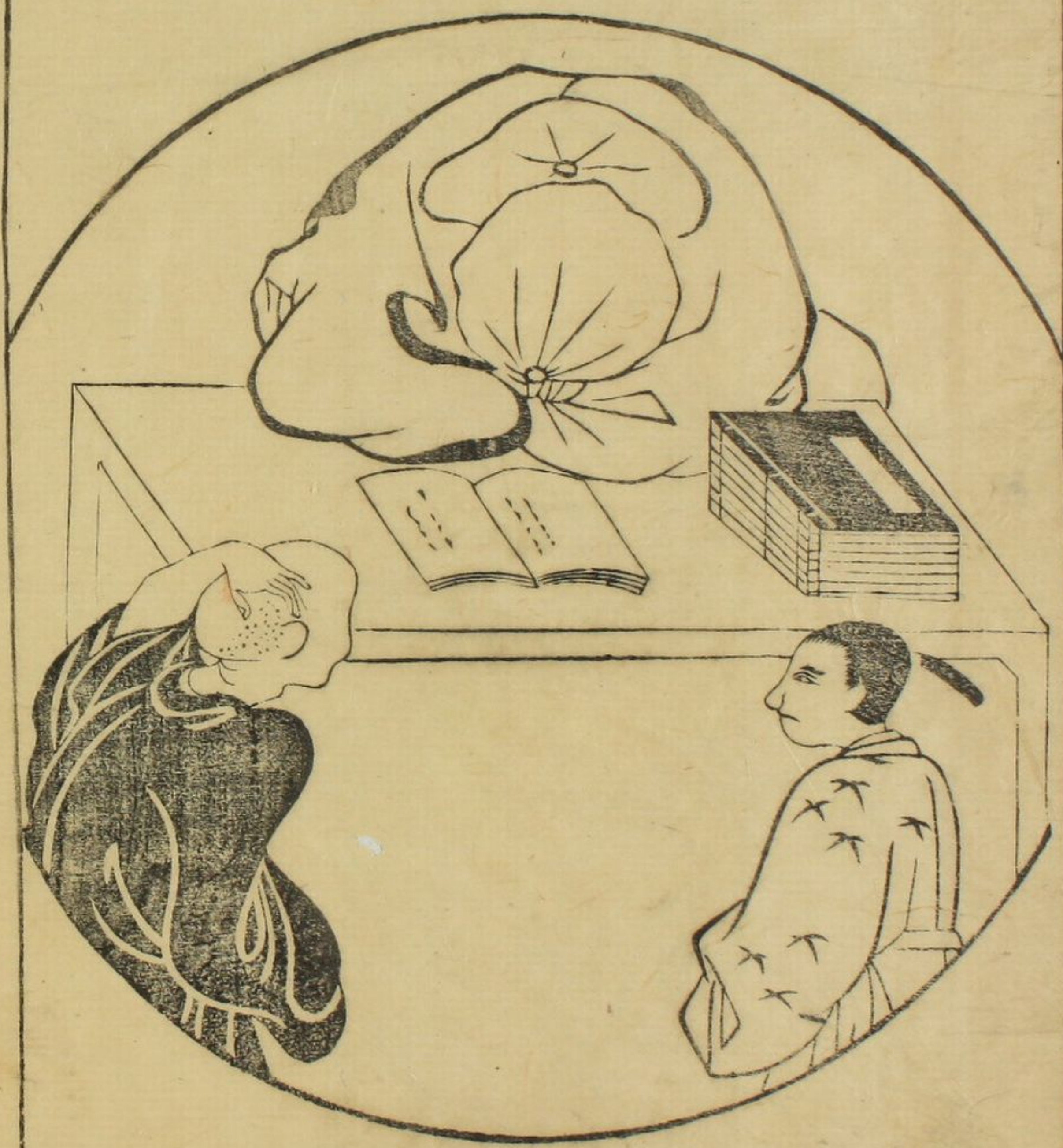


文庫20
349

排
寫
之
包
錢



家類圖



他語古今抄巻之上

物志序

蓮二之序

伊地知氏書冊

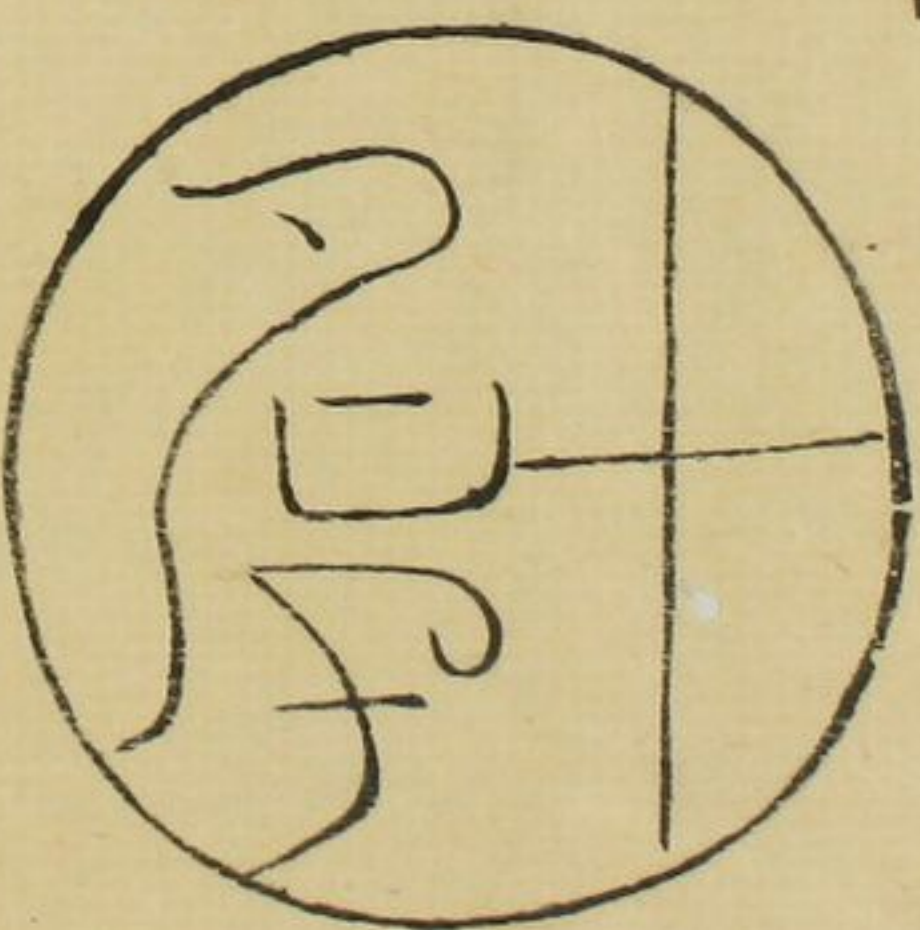
今以他語古今抄を以て漢土の司馬遷の史記
 と滑稽首の二子と比し、凡所の六藝に名とありて
 訓諫の二道と比し、一は素履の詩名とし、名と
 稱して滑稽首の二子能語の二子とて、中疑一決
 の中又あり、より佛印を我のし、中疑一決
 と家の秘法あり、あまの世にわれと我のあり、中疑
 は、中疑一決の二子とて、中疑一決の二子とて、中疑一決

こころは作の所録と二冊とこころは合しと一部
又冊あるをばらけ題号は違ふふとて言ひ連歌と
しるを言ひし作中左に詠諧と連歌にゆかりとて
まてくた代の階級有とたしとて近く今日に離れて
ひらむるより詠諧有今おそと各所よりゆかり
たしとて一類のまてくたの初編の詠諧と左に合
とて千系一斬の種訓あれは先師の古とて此等
をばらけまてくたの二刀西斬の詠ありてまてくた
連歌の両式より合しとていひ言ひおとてまてくた
和歌此式とまてくたありて詠言連歌のまてくたのあれ

公家殿上の詠集とてまてくたとて農工商のまてくた
いへんまてくたといへん詠詞とていへん詠集とて
とてまてくたといへん詠集のまてくたのまてくた
のまてくたといへん詠集とていへん詠集とて
はて詠集といへん詠集とていへん詠集とて
とていへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて
まてくたといへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて
詠集といへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて
まてくたといへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて
詠集といへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて
まてくたといへん詠集とていへん詠集とていへん詠集とて

一 臣の私とりねさるるはあつての國のいふ
たひて石の鑿れむらふ神と談笑し
おひあつての林はともあつての破れぬ
はつて休諧のこころはよく持たし

享保己酉之月吉祥日



古今抄凡例

- 一 此抄ニ〇今^イ撰スル祖翁ノ用捨ナリ且下ニ新古ノ遠因ヲ考ヘシ△再撰^フト先師ノ監察^ニシテ△^ニ授ト公蓮ニカ拾遺ナリ△以今ノ相效ニ知レシ
- 一 此抄ニ要評ト要議ト明監ト之段ノ差別アル法ニ支配ノ輕重アル座ト云ク一世ト云ク百世ト云クナリ總テ新古ノ決論ニ百慮一失ノ辞宜ト知レシ
- 一 此抄ノ省法ノ下ニ或ハ家語ノ詞ヲ假テ實^ニ見^ル猛ノニ字ヲ云ハル制度ニ時代ノ変々シク或ハ用ル其本人ノ自在

ニテ用カハ其人ノ不自在下ハ今式ニ人ヲ弘明セスカハ古風ノ偏屈ヲ山明カハ下ナリ或ハ先師ノ再撰カハ下ニカハ知是トハ弘經ノ如是我聞ニカハ後ニ再撰ノ折言語ナリ

一 此抄ニ證句ヲ奉ルニ系ヲ定テ各乗ナキハ總テ祖翁ノ證句ナリ系ヲ定メスハ此印ヲ書テ直ニ送書ナリ

一 多ハ先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ

一 此抄ニ黑圓ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ然レテ文字ノ傍ニ隔テ白圓ノ印ハ或ハ切字ノ節目ト知ヘク或ハ對語ノ相致ト知ク或ハ段ノ要文ト知ヘシ

一 此抄ニ古式トハ多ハ連哥ノ兩式ヲ指シ古抄トハ貞徳ノ

御筆ヨリ埋木噓州ノ類トト一部ニ埋木ノ名ヲ指ナル師資ノ辭讓ヲ察ホスヘキナリ或ハ稀ニ本式ト云ルハ今ノ貞吉子式ノ本文ヲ指テナリ

一 此抄ニ異名異躰トハ或ハ牡丹ヲ涼見草トハ異名ナリ牡丹餅トハ異躰ナリ或ハ音訓ノ差別トハ白雲ヲシラケモト云フ氏名ハ異ニシテ躰ハ同シ此故ニ異名ト下云イ異躰トト云ル今式ト古抄ノ遠用ト箇條ノ古法ト下ニ悉知スヘシ

あり或はちて清されりしありはてしなく
ふむいひて口授めばはにたれはふりて再撰
の場よりいひておそむしはたきりまゝと
新角のあやとりあんとやまゝとて特稿の中
あんとと鬼園の冊といはくはとておそむ
達をらんを我少年の偏固あんととて武路
の古行人の講てけ式とをりてはたとは
不とい書とりて一復一返の文とてとて
古はとちりあはれははの今式いひて
下はのち名とまゝいひて遠くとも書
のいひ

近くとい撰の出現とまりて他諸を
論よりいひて世は互倫の文とや
詠策の用ちりといはくはかめ
いひていひていひていひていひて
のいひといひといひといひ

寶永七庚寅十月十二日

10/12/11

貞享式目録

大段ハ本式ノ目録ナリ
小段ハ再撰ノ附録ナリ

一 俳諧と誹諧ノ字論也事

一 俳諧ノ訓練ノ道ある事

一 六義ノ今ノ和訓也事

一 冬段句ノ切字ナル事

附 心切の事 中切の事

推切の事

一 切ノ之段ノ差子ある事

附 二字切の事 二字切の事

三段切の事 二段切の事

一 心切ノ多クある事

附 とほりの事 不ほりの事

大廻の事 去切の事

一 押字と抱字也事

附 句讀切の事

無名切の事

一 二品の事

附 浮載の事

領哉のり

一 之のちのり

附 ちのり

一 ちのり

らんちのり

一 百韻の表八句

附 發句のちのり 服の韻子のり

才のり 余波のり 可司司のり

一 四折の曲節

附 起向と句作

撰集のり

一 月花

一 指合と去嫌

一 意向

一 季の節の踏くる物

附 二季の季の四季のり

またの二季のり

一 季とあると新とある物

一 各所へ雜の發向

附 新躰のり 四季格のり

詠諧のり

子にまじりて遊ぶ事ありてはこれ中女に遊ばしむるに
 連て其徳とてまじりては此徳の信言とありて
 今世他徳の染ずるといふ事子にのみまじりて
 まじりては徳のちひなりてはちひあやむれ
 仰る家、教禱の二はありてはちひあやむれ
 ちひあやむれとて大和の風雅と徳書の後と
 一に遊ばしむる事ありてはちひあやむれと古人の
 詞にまじりてはちひあやむれと破りて
 ちひあやむれは法寺の的器とてはちひあやむれ
 ちひあやむれは徳とてはちひあやむれと破りて

虚とてはまじりて遊ぶ事ありてはこれ中女に遊ばしむるに
 連て其徳とてまじりては此徳の信言とありて
 今世他徳の染ずるといふ事子にのみまじりて
 まじりては徳のちひなりてはちひあやむれ
 仰る家、教禱の二はありてはちひあやむれ
 ちひあやむれとて大和の風雅と徳書の後と
 一に遊ばしむる事ありてはちひあやむれと古人の
 詞にまじりてはちひあやむれと破りて
 ちひあやむれは法寺の的器とてはちひあやむれ
 ちひあやむれは徳とてはちひあやむれと破りて

不自在にして一は或は世式とひそくに机前の
二と子とありて一は神子神筆より嘯州のとき
七とあるとありて拾遺集とありて山本より耳目の
公入るんとありて取捨と一子の私あく今や一程此
裏は深より近く一世の實議と實歎ひ遠く百世
の的也とありて天理の實合とありてまゝ也
とありて一節の授記とありて世式のあともくま
は式の名とありていさる命

貞享五年戊辰 子西春如忘日

再撰貞享子式

○ 俳諧と誹諧と字論此事

むらり俳諧と誹諧とを和歌の家より字論
あれと神子史記の素隠と滑稽昔^{コトニ}獨俳諧と
憶らり神文ありていそははく此^{コトニ}俳林と誹諧の所
いかに一列とありて我おの中にも一^{コトニ}延表の俳代
古今集よりけりて誹諧の二字とありて和歌の二
とありて拾遺集よりけりて誹諧の二字とありて
同名の俳諧^{ヒカク}ちりや俳^{ヒカク}と別名の誹諧^{ヒカク}ちりや古^{ヒカク}

し副假名をかきわかれしるもまじくせしむる
て誹諧ヒイハライしくしる事れいしりし風雅の如き
てなりしるをさうしハキハおしるに解し九品あり
て誹諧ヒイハライ二より誹諧ヒイハライ三より誹諧ヒイハライ四より滑稽ケツキ首云
法輔の奥儀抄しるゆて宗祇の書りまうと誹ハ
甫尾抄しる誹ハ胡笳抄とあれハ他抄と誹諧を
ふ各より誹諧の非比ありとふゆとまされしる
より代くし誹の字と用いふより歩抄抄より
てをことあるとふあれはは対しる穿鑿を
ていふれしるの秘訣しりしハ所説はこれ

とてこれいせ

東卷云△再撰サヒもるんけしははよく人偏の
誹字しはて一家建まのま地とえかれし
矯世憤俗キョウセフンソクとてるまをの書は由當とけり
て他より穿鑿センサクをまていしとて例し我々の
遜言ちりせまういしと誹論より連きて或同
かりし誹諧の名と増減し今この誹諧は
常用とえしと同大異の故とまりしんとあれ
るりしと他諧の遊戯ちりとまじくしはく
誹諧の空上戯ちりとあそれて中右の誹おの用

訓諫し諫美し情秘育し替詞の沈み又ちりやら
てこといむしあれせはと又倫の和と本より
君父の善者とさしよんも婦人の悪とさしよ
善と善とく悪と悪とくして直言とありて直諫
はそれいし時主人の機嫌とやういふたれと三言の
大なることいふれしむうより悪王といふち
あふとあふしよとのれ悪と善とありんか
儒師の二言と感徳とくれく或は善をいふ
日しあふちと殿村のことも悪王をいふれ悪と
悪とあらうて比干の腹とあふしよりく善人の肝

とけくはるんむとく人向の善悪くくられ
い十方偏照の光ぬとくあらは後震動此等特
とあふしよん人よりけりて我をいひりあふし
いぬし楚の子西と悪王の徳とくしてると此
談美より楚王の悪とさしよらうやうをね
そとのり儒師のま子も諫官の互義此中し諫諫
とのり最上とありかれ子西とさしよらうや
儒家も師より提徳とくし決断とるうとのれ
うあふしよくあらうてく善人とあふしよく智恵れ
親せよし孔ま子も大なる徳とあふれありて諫美と

ありて敵れ少くはれは直諫する人此れをてて在る
と恐人の引く事とふらるる事なりとされは他者の
る事とて治國齊家の一助なりて仁徳とて
又倫とやうきんは儒術の大なる事なりとて
一もこととていへば諷諫なり一も事にあつては
琴の正諫ハ明節明節不可久安也故
諷諫ハ取容とて世賢ハ諷諫の内秘とて
此文ハ諷諫の外現とてなりて諷ハ他者とされ
くこと一も事とて今も他者此れにありては
一も事とていへば高き遠の風とありては敏捷の如し

はありてたはひ者相に州の事とて一言の下は着破
一も事とて歌人連音此指讓とありては建物の
こととて虚名のみとては事なりとありては
此れ人知ありとては事なりとありては
原懐とて此れ此言ハ類回とて事なりとありては
の事とては事なりとては事なりとありては
一も事とては事なりとては事なりとありては
さる事とては事なりとては事なりとありては
もとては事なりとては事なりとありては
とては事なりとては事なりとありては

ちるるの詩の所義此河法ありとせしむるは
 六美の後の和漢とて今的ありとせしむるは
 古語のしるるを六種とせしむるは
 まことつらうとて毛詩の六美とて言ふは
 ちのちのしるるは此河法の名を以て訓とせしむるは
 てあめ和音とありてい運音とひげとて一發一箭
 の的とありとて或や當時此河法ありとてあり
 推考と此河法とありて○今按るるは六種此
 差ふを凡種との種とて世間の人即と訓論
 園雖と哀楽とてありとて○王侯士庶の心

とけりてち河比真の之緯とて眼界の景物と訓
 論とて文所質とて力とてくも熱竹木の
 名とてち河比真の之緯とて人との好む時
 の風波とてち河比真の之緯とて人の好む時
 の王を此のありて○天下此河比真の之緯
 ち河比真のありて○地利と人利と
 二用とて此河比真の之緯とてありて○
 とありて○此河比真の之緯とてありて○
 六種とて此河比真の之緯とてありて○
 此河比真の之緯とてありて○

中ありて先と我々の家護るべきなり

風 訓義我凡ハ詭諭ナリ多ハ信ト訓スレシ和歌ニ

ハ副歌ト訓シタ下比真ニ賦ニ結ハシモ詩曰風者

多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂

其情周南召南親被文王之化ニ言何為風詩

之正經云然ハ其国其人ノ風俗ノ善惡ハ風謡ニ

依副ナ美多ト云ル故ニ風化トモ註セシナリ○今按スルニ

風化モ風俗モ總テ詩歌ノ詠諫ニシテ上所化曰風

下所習曰俗トモ上ハ以風化下下ハ以風刺上トモ云ヘリ

何レモ時代ノ風謡ニテ鎌倉ノ代ニ首蒲ノ謡ヲ作りテ

其代ノ風俗ヲ刺レ類ナリ○獨按スルニ我家ノ訓

美ニハ風諭ノ二字ノ意ヲ連テ詭言ハ訓スキヤ

然ラハ俳諧ノ字ト成セハ詭諫ノ和モ叶フヘシカ

去レ凡名ノ大騷トハ此等ハ百世ノ明鑑ヲ待ヘシ

訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ多ハ正言ト訓スレシ和歌

ニ直言歌ト訓シタ下平話ノ徒言ニ紛レ又レシ

俳語ハ音訓ノ響ヲ悼レシ○今按スルニ風雅ノ二賦

ハ漢土ニ詩經ノ所成ニシテ風ハ虚ヲ以テ天ニ起リ雅

ハ實ヲ以テ地ニ止ル詩經ハ此ニ美ニ濫觴シテ乾坤ノ

二卷ト成レリ故ニ我家ニハ風雅ヲ虚實ノ二用

頌
 一見テ以ニ懲惡ノ虚ヲ用イ雅ニ勸善ノ為テ用
 六雅ニ正直ノ意ヲ汲テオホキヤ公言臣訓スキヤ也等
 八異名同躰ノ例ニテ一世ノ衆議ニ據ヘキナリ
 訓美ニ頌ハ称ナリ美ナリ多ニ祝言ト訓スレ和歌
 ニモ祝言ト訓レテ引歌モ節ル所ナレ然レ詩序
 ニ雅頌ニ躰ノ様トテ雅ニ国家ノ諷諫ヲ令言ニ
 頌ニ君父ノ壽量ヲ祝レテ神ニ告ル志ハ勿論ニヤ
 此故ニ六美ノ引歌モ頌ノ躰ノ明ニテ且外互各
 ハ節ハレ今按スレモ詩ニモ雅頌ニ属朝庭郊廟
 樂歌之詞其詔和而莊其美實而密正

賦
 之於雅以大ニ其規和之於頌以要其止也
 詩之大小皆也然レ六雅頌ノ二用ヌル外ニ在密
 次ヲ備ヘテ諷諫ノ正直ヲ行ヘ内ハ和實ノ情
 シ含ミテ詩序ノ優美ヲ調ヘレ爰ニ孔子ノ曰
 給ル文王ノ文ニシテ孔子ヲ我家ノ太祖ト感荒自辱ノ
 和節モ此謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
 訓美ニ賦ハ鋪ナリ量ナリ爰ニ美言ト訓スレ和歌
 ニモ美歌トアリ又選ノ本ナシモ象事明白也
 ト云ル眼前ノ物ヲ美並テ直地ニ次女情ヲ演ル
 謂ナリ定家卿ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

比

四季二月雪ノ姿相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
 ナリ賦ハ賦ニ文章ノ惣名ナリ
 訓美ニ比ハ比喻ナリ又ニ准^{ナツラス}言ト訓スヘシ和歌ニモ
 准歌トアリ候ニ托物比真トハ詩人歌人ノ優情
 シ梅ヘテ鳥ニモ木ニモ物ヲ言ス類ナリ或ハ韵書ニ
 比ニ子ヲ鳥^{ナツラス}比^{ナツラス}比^{ナツラス}於物^{ナツラス}鳥^{ナツラス}托^{ナツラス}事^{ナツラス}於物^{ナツラス}
 云ヘリ○今按スニ比ト真トハ姿情ニ先後ノ心得アリテ
 比ハ物ヲ取テ其姿ニ准テハ真ハ物ニ托テ其情ヲ起ス
 物ヲ催スト物ニ催スト自他ノ差別ヲ知ナリ此等ヲ
 他語ノ微中凡解紛凡云ヘキナリ

興

訓美ニ真ハ誘引ノ義ナリ又ニ誘^{カヒ}言ト訓セシ和歌
 ニ喻^{カヒ}言ト訓レスト凡比ノニ訓ニ然レ然レハ真字
 ト凡字ノ和訓ハ美ノ中ノ太騷ニテ我内ノ象議ハ
 知是トト百世ノ明監ヲ恐ヘキナリ○今按スルニ真ハ
 一美ハ和候トモニ今明ナラヌヤ去ル論語ノ陽仁見^{カヒ}
 ニ子路ニ詩經ノ風流ヲ勸テ詩^{カヒ}以^{カヒ}可^{カヒ}興^{カヒ}トハ四季
 ノ月雪花鳥ニ誘^{カヒ}テ優游ノ情ヲ真^{カヒ}セトノ
 謂ナリ然ル例ノ朱註ニ發^{カヒ}起^{カヒ}志^{カヒ}氣^{カヒ}トノ
 云捨レハ孔子ノ宣給^{カヒ}フ似^{カヒ}而非^{カヒ}ナル物ニヤ興ハ
 次^{カヒ}シテ遊^{カヒ}真^{カヒ}ノ真^{カヒ}ト註スレシ詩者人心之感

物ニ而形於言ニ之餘也トハ朱氏中詩序ニ云
ナカラ何故ニ自詔相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニテ
文章ヲ後ニセシ論詔一部ノ取違ニテ先後例ノ
察スヘキナリ然レハ真ノ美ヲ以テ詩歌ノ大本ト

知ナリ

○發句ノ助字の用は如何なる事

むしり助字の用は十八字の用ありて和歌の連歌
しを此の例に依りて例の所を以てしを以てしを
いふは和歌の心持と異なりて和歌の心持は

るありてはむしり中右の記述よりしりくの名目
ありてはむしり連歌の用はありては和歌の
記述より同類の用はありては和歌の
助字の用はありては物に對しては是の用はあり
てはむしり記述より物に對しては是の用はあり
ありてはむしり記述より物に對しては是の用はあり
記述より物に對しては是の用はありては和歌の
記述より物に對しては是の用はありては和歌の
記述より物に對しては是の用はありては和歌の
記述より物に對しては是の用はありては和歌の

ありまゝの各句のちよひにひてふとさるるま
及ねて耶ヤとていふまゝとねカナケリ裁来と法を
まねていふまゝとていふまゝとていふまゝと
さへてまねていふまゝとていふまゝとていふまゝ
制札の法とていふまゝとていふまゝとていふまゝ
といふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
といふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ

心切
かゝるおねまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ

はれい切のまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ

んを何とていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
かゝる心詞とていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
まゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
いふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
れいといひていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
又七の句絶のちよひにひていふまゝとていふまゝとていふまゝ
ふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
へいれい上段中段とていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
とていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ
とていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝとていふまゝ

實義とすのへ一況や可心所着の解にやと詞心
みさねしとあつし者可しとゆまの入るる句
とあるんをゆると道のみ悟自視あつしと世の義
と意して自らゆるむと後うもどねとみれ不
の斬あれとあいらちとよるる悟うと感作と
一信の二字あは

中切 猫の意やいし時。花名の勝有

はなけ切にあはゆしとあつし。何しとあつしとあつし
と詞とあつしとあつしとあつしとあつしとあつしとあつし

ちりと句取めおとまらしとあつしとあつしとあつし
とくりちと中切とあつしとあつしとあつしとあつし
句義ありと講師の人せねらひとあつしとあつしとあつし
ゆはしとあつしとあつしとあつしとあつし

世と旅とあつしとあつしとあつしとあつし
人との家とあつしとあつしとあつしとあつし

け切と全く新制のありとあつしとあつしとあつし
自他の権取ありとあつしとあつしとあつしとあつし
と物と對しとあつしとあつしとあつしとあつし
あつしとあつしとあつしとあつしとあつしとあつし

さへやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切
さやとみしむる言とちひしうの事の中切

○切ふは原の差である事
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...
古抄に二子切に子切の...

こと高き弱とてこれもあつむし湯也物名お
 とくをさるるやけ格をなす新嘗たれん実浮
 へ例のまじりもや或は給の類とすけり給ふ
 伊勢とてあつむし方とてけりさるるを
 膏られしとて膏られし神とてこと敵討
 ことこれとて再撰の神句をねおすこと
 或は連音とて流音とて流地とて流子とて流
 両家の神句の流音とて流地とて流子とて流
 なるおまじり。今接するた連音とてお月申の流
 句とあつむし。昔もあつむし。今もあつむし。流音と

神言の神句とあつむし。流音とて流地とて流子とて流
 へきくお月申とて神言の流音とて流地とて流子とて流
 入るあつむし。今接するた連音とてお月申の流
 へ例のこふおまじり。昔もあつむし。今もあつむし。

之段切
 梅の葉はりこのおまじり。昔もあつむし。今もあつむし。

前章とて武江の事流さる歸念の流音とて流地とて流子とて流
 け句の流音とて流地とて流子とて流。今接するた連音とてお月申の流
 へきくお月申とて神言の流音とて流地とて流子とて流。今接するた連音とてお月申の流
 へきくお月申とて神言の流音とて流地とて流子とて流。今接するた連音とてお月申の流

ありんかといふに優海は極である。素とてい
 へばこれである。後にはあんなに掛りか
 かりに掛りかゝるの業やを掛物と云ふは
 結前生後の係ありてはかくを掛る業のほや
 と云ふは十成の能階解ありとこれを二能の曲意
 とあるは——より素とて向中へ切字をなれしを
 かくと此素とての——に能と例のとふちり素と
 いふ字切ら字切の例とて二能切もあるは連
 ねのちおよこし名あるれ自家の能向とあり
 るは——とて一々の素後と素の——

東を云△再撰するにけ切の能を素句と
 せらり切字ありてふとて切の能と一能と
 分能とて二能と三能とありてはとて二能
 の名目あるれいふとて切の能と又月而連能
 の古也又とていふとて二能の能向あるは
 例の能向不素とていふの能向と信とて
 けとてとて二能と三能の名ある二能の能の各
 ありとていふとて我が家の能向とていふとて
 再撰の腕力とていふとて一々の能後かく
 といふとて一々の能とていふとていふとて

よく誦ふとふの用いぬれと申候ふ。おのふは
捨ありてふのりしに。おん各りて次のせりに
を。見とられし牡丹と芍薬と父母とて。こま
い。如雀麦のむありし。論多ふ如雀麦のむあり
あれいれとて。此二所切とや。いじむ。む。む。む
の曲節とて。やと。皆此令。皆。う。む。厚。の。は。禁。ま
橋。さ。く。ら。杉。と。は。前。よ。ら。む。月。そ。と。御。詠。の
私。歌。と。翻。抄。し。林。と。さ。い。様。と。枯。れ。松。と。
ふ。さ。は。れ。か。う。う。月。の。清。涼。と。清。く。れ。ぬ。家。か
の。き。り。を。移。さん。或。と。換。骨。の。は。と。う。に。

ふやと授の用とらふと。かくのきと。此二所切の
より。も。れ。ち。ぬ。ら。う。く。た。は。め。の。う。に。所。切。か。あ。む
又七五の。と。あ。う。と。を。た。し。今。と。め。り。う。の。う。
に。之。物。と。う。に。用。と。あ。さ。い。た。れ。と。所。切。の。曲。節
と。と。さ。む。し。ぬ。は。新。古。の。差。お。と。ま。れ。て。せ。

○心切ふ多各ある事

今。あ。の。よ。う。の。切。字。は。お。う。心。切。と。ら。ふ。可。し。御。下。申。切
心。捨。抄。切。し。は。て。二。所。切。の。所。切。或。と。ま。う。と。ま
お。り。心。切。と。ら。ふ。可。し。御。下。申。切。と。ま。う。と。ま。

といふおて千六の歳を修めりより字をなせり
 しゆとあてあげていふはむかひをなせるといふ
 といふとや今こそ再撰の場なりといふ
 一節の判断とありて幾字も二つおの各とて
 耶字もいふ所の各と拾へてふ月日の説と
 もあゆむお多ふ各といふれしむしとてお祇の
 八十歳といひ紹世の五百と修しつるし仰せ
 百千万億といふも一宗くもあはせりて
 各なむとゆきよつととて彼子自傳の談笑訓
 とあり所の後話あれいおをたてし御のあはれ

けり或月の増減あるはちとてこれの捨詞
 と言ふ書面の所命ちりふらとて各の注句と
 するらんやこを遺稿の大注とて用抄の
 例の家傳よりくもせむ

桐のやも。新師ちり塚のり
 木めむ。むしとてあはれむ向

されし朝の一事とて田舎の雨を等しとてあり
 といふといふとて家の富貴といふはつとて
 ありしをいふといふりといふ向を切ると桐のや
 といふはれしらふと桐のやをいふといふ

ちりし心しと托く托差ふあむしけあふ和歌や辨
 ちりし有一節一辨し見様辨し以下のあ各あり
 こまし托ありとあるくは作さねれはしやあし
 大廻しと云妙し心切の標はあんと東と各句は
 句強らむとあふと各句しんとあしとと物あ各
 大まうしとあしと可とす心所着自句よ地よ
 亦あはれし各句と怪し各句あんとす各句
 し各句とくしとあしとあしとあしとあしと
 ちりし心しとあしとあしとあしとあしと
 各句し心しとあしとあしとあしとあしと

心切のりひかりとありしとあしの人と雲とあしと
 ちりし心しとあしとあしとあしとあしと
 物れまねれとあしとあしとあしとあしと
 月照しとあしとあしとあしとあしと
 各あしとあしとあしとあしとあしと

東花と世屋と村と曠とあしとあしとあしと
 路ありとあしとあしとあしとあしとあしと
 沙句とあしとあしとあしとあしとあしと
 ちりし心しとあしとあしとあしとあしと
 孫言ちりしとあしとあしとあしとあしと

古抄の石目とあはしむるは、滅ねて撰集
うかやの山鹿たととあはるるは、たとあはるるは、しは、あら
 仰命のまゝにありぬく武保の遺稿とあは
 して今此の句とあはるるは、しは、あらぬとあは
 せしむるは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 の言此處持してなる所の言句に罪ありと
 するは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは

大廻

幸時のねとせしむるは、しは、あらぬとあは
 りしは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは

まはるるは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは

の言と我々の秘教とあはるるは、しは、あらぬとあは
 も世の言此の言とあはるるは、しは、あらぬとあは
 の言とあはるるは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 一確証の証ありぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 而るは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 多と大なりとあはるるは、しは、あらぬとあは
 の言は、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 偏作とあはるるは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 と決まるとあはるるは、しは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは
 ありしは、あらぬとあはるるは、しは、あらぬとあは

ちうとせいの句おやと陳とちうんをせしにけるの
 後とらりやとけをまほふ男と野詞のれをう
 連言此艶詞とあつひとかりとあつひと他借の
 曲とつとあつひとあつひと格と常絶のれ
 といふといふと善と曲のんちとあつひとまゝ人
 業といふといふとやらのと白馬の文章詞と
 常絶のれと陳とかりとく言と進は所の歌とは
 向ひまたちときとちうと陳れと向ひとあ
 秋のたをまといふと今と不起借と結語とた常山
 の絶れ借ありとてと尾と詞とをといひ尾

といふとちうとまといはれと文章のいあつひとあ向
 七きとあつひといひたてと和絶ととてつとあ
 他借とと十七子の終りあつひとちうとあつひ
 和言此後借とあつひとまといふといふとちうとあ
 のあつひとあつひとあつひとあつひとあつひとあ
 ちうとまといふといひとあつひとあつひとあつひ
 いふとあつひとあつひとあつひとあつひとあつひ
 へ接象のあつひとあつひとあつひとあつひとあつひ
 玄妙
 まろしやとあつひとあつひとあつひとあつひ
 あつひとあつひとあつひとあつひとあつひ

二十のゆき北をとる會し心ゆと惣格
或を申ゆきと東と撰採ゆきと二階と二階
とふとのゆき一と彼ふ心ゆのふ各一と心ゆを
ふふ白讀ゆを撰採ゆきのまきこく後不
ふらうけけゆきゆんふらうけ白讀のふ各
ふんといかく一名とけくふりけ種と心ゆの
ふふとあふと大和讀癪のふ各と心ゆ
ふゆやふ梅の常用といふむ〇取まき持まらに
ゆきせふととふとい連珠のふ各とはくとい
ふふのふゆゆりて各と宮りとい詞ふといまに

をゆの白ゆとありてかを合ゆといふとれし
ゆゆを例めといふとありてゆりて許ゆ
とやあふといゆゆと古式の名と撰採ゆ
といふといゆ合ゆといふとい過るゆゆ
とゆゆのまきや二ふといゆとあふとい
東をふふ再撰ゆゆといゆとあふのふ詞ゆ
かていとい白讀とゆ各のふおといあふ
ゆきせ各とありてゆゆのふ白ゆゆといふ
ゆれい白讀の類説といふといゆのふ
ふといゆゆゆ。後ゆゆゆゆ

こそふ句とくうらまきり人。物あつこいものさる
 きてら後し能かまひて感持を家業の心持
 しこととまきを思ふ世後も折らるる後
 の百八人うけてるに群りて識さし^{正并}か次の中
 仰めししまぬの各々過者あんらん中各切
 し罪あつんことをかまきまぬの各々とはんり
 中各切の心とあん洋とあつてまぬと中各
 とを極よつて天地の如くしてるのまきり
 不らん言得しこと各月におらんこと
 春の秋の二神もまぬの各々曠るあんらん

中各切と惣各一中心切のふ各とあつて
 和歌連音此高よとあつては他後より諸
 の各目とといひしことまきり減ぬの法
 して再撰の大伴してまきりせられし中各
 ら切と神のまきりあるまきりや例のまき
 してまきりまきり也

嘆みくも松の中より物あつ
 中各切 口方らむを次つれり信の法
 各月のむらして下棉とけ
 一らかゝる松とまきりまきりまきり

はらひこれの御奉とまらうて世々切らふ
ことと世の事より世といふ世にわけても分ち
ついでにさへして掃とほけつらねし中世
の朝のあまらりあまねらふ世にあはれし
あうらうと御の存可あつらんさちあつる
まじとせむと世々切らふと一に御撰まら
に世々切らふと一に御の二代御と頃漸
秘密の御事と一に世を御よめたりと世
一を世加ふることまへるまじと世々切ら
用として世々切らふと一に世を御よめたりと

まへにあつてこれと世々の世と一に世
と世より世一と世と世々切らふと一に世
とらと世と世と世と世と世と世と世と
て何の子御とあつてまた西村藤庵の遺稿
とら白髪吟とら不序詞ありて世々の世
はらとあつて世々の世々の世々の世々の
下世向といはれおつて世々の世々の世々の
ありはらと世々の世々の世々の世々の
賞格と世々の世々の世々の世々の世々の
名おとらあつて世々の世々の世々の世々の

しよりしむいせし△様もて撰りたる事あり
教百章此者向あんに一言の際とてきりぬと
りあふりあくほりたあふの者向し所向し字此
奇言怪語おそれいんし入るもやあてりんし
今し不案のこあてて滅後し胡亂ちりおと
柄ときとてまた又七章いあんにたれし字
奥此ぬるる

田一すん拵りまきり柳うか
おきり扇引はくくお拵り

はれいり奥此ぬるるとあふの奥此記り

武の素形とらふもよ字も湖南の本宿言に
おたりて東武のちげりしりてしりて
いし付し自字とれり滅後七章の秋
ておまらる本紙の中しに花の二冊とて
洛の志素とてしりて拵りたるは作し
あふり柳の二章とて奥此記りあふり
拵りまきり柳拵りしはの文圖し
次し扇のつぎしと契り此拵りし中
し橋の茶店とて拵りし扇とてしり
よしとて全伴の家拵りしりし扇

ふあつねし和漢ノ音は格と云ふは借
の人此優格と云ふしや例のあつねとあつね
つまふとの減な此例はあれは

出く解とく鳴くと。本音の音

ん切

肩掃とあつねと。みあつね

つまふとあつねと。みあつね

右の字とら切と。つまふとあつねと。中
の切とかくのつまふとあつねと。あつねと
つまふとあつねと。あつねとあつねと。あつねと

下段のつまふと。上。中。下。此の切とあつねと。詞の
あつねとあつねと。あつねと

二字切 秋涼し。あつねとあつねと。あつねと

而向。あつねとあつねと。あつねと

右二字切と二字切あり。現在のみ。此の字は静と
あつねとあつねと。あつねとあつねと。あつねとあつねと
あつねとあつねと。あつねとあつねと。あつねとあつねと
あつねとあつねと。あつねとあつねと。あつねとあつねと

二音切 音。風。馬の。あつねとあつねと。あつねと

三音切 音。あつねとあつねと。あつねとあつねと。あつねと

右之章と云は紀行ありておと駈路の巻後
 ありて之に後して論あり後と終り各所の
 叙して論をいふ子ゆゑ似これとこれとを
 二にゆゑやいふもいふれ如行とあれは極き故
 ありて極と云はてあつてを終へまると云はに
 一極の詞と云はて馬と云ふなりぬる馬哉と
 云はに二極の心と云はてなりおとの音用へ
 おとつゆり詞と云はて一極の心と云はてめあは
 けいふまをいふてゆまをいふていふてゆまを
 といふなりぬるといふ時ありて

古事記

句讀、忘れまを依おの中と。いふ流あり
 海をりや形ありありのまは
 右之章と天和の比此作せられし例の曲即
 あれいれとていふし。まをいふて授まを
 に句讀のまを本式のまの中ゆゑ極め意
 小既らりの月とやいふ。いふちや。いふまを
 といふありとていふれの中ゆゑ例のまを
 て句讀をいふて授まをいふていふれは
 之後と例と云はぬの指す。いふて授別のまを
 知れやといふれまをいふて授まをいふて

古事記

古今抄

追善格 秋風よ折れてかすみき。常の格
常帰よりありけり。夏の蓮叶

右の事と追善の世有りてあり。松尾山園
の武門の志とこととありて。後を
國司に九の讀きよ。京と失つて。とありて
まゝと六の世に格のつ子とありて。と
二の事との事。や。とありて。歎息の哉
と用ひられ。追善を格とせり。下。東詠の
まじに讀さん。た。と。能。清。の。事。あ。れ。た。れ。此
句格と格。と。つ。切。子。の。有。り。と。評。と。され

と七の事。帰。と。遣。帰。と。訓。下。の。思。郷。の。名。お
とありて。帰。と。信。む。と。此。訣。對。と。見。る。一

即與躰 糸。ほ。ん。む。ん。の。な。と。七。三。末
む。し。ま。け。秩。父。殿。と。お。推。し。れ

右の事と二のの訣。と。下。の。切。子。の。評。と
ありて。ありて。七。三。の。事。推。と。あり。か。り
後。の。事。と。殿。の。事。と。懸。懸。と。あり。と。と。と。鑑。記
の。滑。利。と。あり。と。あり。と。追。善。格。と。あり。即。與
躰。と。あり。と。あり。と。あり。の。名。同。と。あり。と。あり
た。れ。と。あり。と。あり。と。あり。の。事。同。と。あり。と。あり

古今抄

廿

世にあらふれ式に實格の重とあらむ也

格ゆふ序の口とあらむと頼賢

毎國縣

ほむとよし竹抄の口とあらむと

右三事と毎國縣とと視るよしと積善の
選場よかれ物供の面れととら入集
まるとよしと視るの口とあらむと遺行
の巻詰ととらゆしと多ふゆしと竹抄の口
と毎國の形寄ととらまるとゆしとと
治あれとゆしととらまるとゆしとと
後と個中ととらまるとゆしとと

ゆし次々ととらまるとゆしとと

ととらまるとゆしとと

ゆしととらまるとゆしとと

ゆしととらまるとゆしとと

ゆしととらまるとゆしとと

豊年格 文とあらむとと

色とあらむとと

名とあらむとと

ととらまるとゆしとと

のゆしととらまるとゆしとと

あつてもおぼあつて切手此各目にしてその古法
論は或る二條といふ所といふ撰抄の中
其を心切と惣名とありて今此序本と別名
とある一ノ梁や大廻云々と論ありといは
といふ用なりといふ中切といふおと向藤切と
物名とありて今此序本と別名とありて
其れ中より可名切と祀名いふ所の別名
つとせしむといふ所を心切の別名として
子名と二名二條ありて物別のさういふ分の
あつてはらう二所の實様とおぼされい或目の

多岐といひあつて古法の各目と様として
字名此見向し其あつて所々の勅撰
目とぬいひて今此序本の序本といふ所
後よりたつ所の再撰し紀行の二巻と総い
花そのの藤子と悔しとてわう切を七七八の
比らりや祀名の西遷化しその年此丁月
たつて神子庵の遺稿と點検するに武の杖風
あつてあつて芭蕉庵の及故より湖南の遺稿
い乙州又庵といふ洛陽の遺稿といふ掃
よりいへば伊賀此西藤庵よりて再撰する

旧稿を祖為とて所の家を撰みあれ天和の此此
その稿よりえ孫の遺稿よりたまりて新撰の
遺稿を例とて所の大任あれ侍学よりたまり
るあくも記とてよりあかきりたりと新撰の右
とてより美玉の傳とて人のこととて一句一事の
及故とてより龍をとりてふかあきりたりと
二章此抄店よりとりてとて所の家を撰みあれ
新とてよりや家より所の家を撰みあれとて
えれとて所の家を撰みあれとて所の家を撰み
諍ひありて例とて所の家を撰みあれとて所の家

の書いとけりて二章此優劣とて議よりたまり
あねに二章の家を撰みあれとて所の家を撰み
家議も程ありてとて所の家を撰みあれとて所の家

○二章のうふ此事

むより和歌連よりたまりて所の家を撰みあれ
名よりたまりて所の家を撰みあれとて所の家を撰
たりと何れよりたまりて所の家を撰みあれとて所の家
字書より所の家を撰みあれとて所の家を撰みあれ
の二用とてこれよりたまりて所の家を撰みあれとて所の家

疑のちとさといひ手と哉と疑の物とさといふや
かゝるに同じふ訓ありとさうと哀やあゝも哀かふ
りもあのみを大和の助語として漢と那字と
用ひて先と呼吸の餘韻として那字と訓と和
へ大和直名とさうと哉那の二字ちち一和訓
哉と末のれら假名韻府とさうとま
東を云け假名のりる假名韻府とえ福と幸
の事稿とさうと中とと假名の助語辭とやう
とさう大和の字を遠彼にかゝる中二と八義
の詠文といひて音詠及詠の用詞とさう

或と定家卿の假名遣とさうと和訓の
書法とさうと或と文章此哉断とさう
假名直名のりるさうとまうとむられと假名の
中端とさうと假名と世とさうとさうと定家
の事知とさうと和原の助語と通用
新と大和詞と撰と今此訓美いと書と教を
さうと角撰とるんけ二訓い哉とさうと假名
のりとく末とさうと葉の訓美とさうと假名
とさうと決名の詞とさうと詠文とさうとケタリと
と通界の詞ありとさうと去來のさう

モウ同ト此音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
もも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
子いへしと云くも此の如くも知るるは音と云くは
と云くも此の如くも知るるは音と云くは
直名の二解と云くも此の如くも知るるは音と云くは
はくは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
あんなをれと云くも此の如くも知るるは音と云くは
の名を用ゝるゝは後哉と云くも此の如くも知るるは音と云くは
の向とありて上へんと云くも此の如くも知るるは音と云くは
して此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは

みく。哉のれとんと云くも此の如くも知るるは音と云くは
和を此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは

東在云例の在りては後哉のりては各例の多岐
と云くも此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
と云くも此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは
此の如くも知るるは音と云くも此の如くも知るるは音と云くは

音近う振の中節と云くも此の如くも知るるは音と云くは
字一五らの月と云くも此の如くも知るるは音と云くは

これいふの用と云くも此の如くも知るるは音と云くは

古式の常法や○今に接するに歎と平此二子と
はらふやめ子此却およりく歌を高く平の聲
傳文とたひく平と用ひて後か疑の詞あり
傳れい返すと聲ありとらると歌書の上とをて
返ると聲としはむとやん何なるや例のもし歌と
あつと多に切字の用と端さい法とて疑ふと
端し及字と傳く例の抱字よりて此とよと
まつとよと也○獨接するに古おのり了頓哉と
了とよとまつと初家の名教とあつと頓平^カと
へま^カと傳語とあれ。と後とあれ。や傳り

あめ子も。此字も大和の助語あり真名よ平^ガ那
と傳り^止和止と法とて二詞とに頓ひのさあん
し尙字よかつて此の字よあまむはれこれの
か接と古式の各目とあつとむれい世の家語と
家あへく百世の如盤とまふと也○接まて接
し助語の平しと世の。此字のあつとさりと連能
の両家あつとに現在事まわと切字よと過去切字
よあまもやたれうと也。此口傳ありと若いをい
つと傳まふ。歌まふ。いし。と傳あつと切字とあつと
とむかへとも。と傳あつと切字とあつと

いづくのいづくの例にたのまされる理とあるはたを
 とに他のたのまされたるにたのまされたるにたのまされたるに
 只他のたのまされたるにたのまされたるにたのまされたるに
 いそくに他家の音用と論まはれり不致をて過云
 の二を名取。定。も。す。中。も。寒。見。見。同。の
 四子たのまされたるにたのまされたるにたのまされたるに
 切字し取へたるにたのまされたるにたのまされたるに
 一も不致不致と論まはれりたのまされたるにたのまされたるに
 全く助語とあるはたのまされたるにたのまされたるに
 まるなり切字の音用と論まはれりたのまされたるにたのまされたるに

一子の信とのり文句にたのまされたるにたのまされたるに
 他家の事自らのたのまされたるにたのまされたるに
 い切字とあるはたのまされたるにたのまされたるに
 在式の名目と論まはれりたのまされたるにたのまされたるに
 と抄回とされたるにたのまされたるにたのまされたるに
 ずありたり他家の字をたのまされたるにたのまされたるに
 或はたのまされたるにたのまされたるにたのまされたるに
 へると論まはれりたのまされたるにたのまされたるに

東老云け一應と大切のほたけして漢土のまはり
 音韻のまはりたる例に日本のはたけとあり切字

ちりとの何れもさうであらう。その字と大和の助語
 取らまをあらまはあらまも或を成る。起るら
 しまのいやる未決の語これ例のも在伸とせね
 なるなりまなりまなりまのねてらまじとあ
 疑辭とせねるるるん助語とせねるの和漢
 の例ありや或とらまは字し及なり例の推
 し論語の正字しかはくくは緩詞とせねる也
 くれの和訓の款文とせまといふ言ひ方語ら
 づららむの例もくは義の訓とせらるませ
 蓮ニ云はるる連流も尔遠流のりらと文意此

意同くは終めの助字おとありてあれ後音
 と和訓と通用し手語のり用とせらる也
 の實永のまおとらるるは和訓とせら
 らるしとせらるるは和訓とせらるる
 といふと假名をよまらるる直名をよま
 らるるをよまらるる假名をよまらるる和漢
 の通用なるとせらるるは後とらるる一假
 名と和漢の用ありて始と裁字の二用とせら
 らるる裁と手と訓と助語とせらるる手那
 といふ助語と裁と訓と假名

の通韻あれの本或るもの同といふ訓ありて
 とちりし小韻の詞ありし移るるに類義の義お
 ありしをとも一名にあらざる我にけし武の
 微中と信とく一次に耶と世の字もに
 ちり漢志の音あはれ大和とえと音治とい
 へる事ありき事ありし録とい録といは利
 砂録ともおせ次に字と次の録より歌を
 の録と録とを録といはるるに能信の事なり
 也とやと君が代とも林が書ももれり手
 次の子美あはれと類思とてあらり孔子之と

ことと儒書と點ちるの憶愛とあはる林と
 君と何の憶とあはれと詞のあはると
 了りともある一次に北野園と我書北
 議とてまゝあはれりて耳となをまて
 用たて家少とあらん譯とあはれに北野の助
 語とる君とさく人。さく人。何のあはれと
 けりたてとと和訓の神祕といふ語類の助音
 也大和の助訓も言語不到のるにあはれと
 り本の人北野とてたて漢志の助録録と後
 とむとと取てと取まて推考とあはれと取ま

八句の箇々の神祇類教意中常々各所々各を
 増すべし者句服字の中々に一書の程方と成り
 ちよ下の教句との得しと初行との所おちる
 一目をさらし可きと成りしと一はれし書字と
 といふ物といふれしと非祇下此を同といひしと
 ちのそ一書の曲意と成りしと一はれし書字と
 百約の表は句と成りしと一はれし書字と
 左極の一氣此物といふれしと陽の字此といふれ
 されしはれしと一はれし書字と一はれし書字と
 此子の所はありしと一はれし書字と一はれし書字と

此後と服と成りしと一はれし書字と一はれし書字と
 一とちりしと一はれし書字と一はれし書字と
 此後と服と成りしと一はれし書字と一はれし書字と
 の得しと成りしと一はれし書字と一はれし書字と
 此後と服と成りしと一はれし書字と一はれし書字と
 さらしと一はれし書字と一はれし書字と一はれし書字と
 此と成りしと一はれし書字と一はれし書字と一はれし書字と
 一とちりしと一はれし書字と一はれし書字と一はれし書字と
 此後と服と成りしと一はれし書字と一はれし書字と
 一とちりしと一はれし書字と一はれし書字と一はれし書字と

少の字での字に狂きよ余地ともの一少の所句入
 加ふちさんしんしは格えそを替へるに古式よ
 初字なるといふ或はかあしとあるうらと我あま
 ちのあはれあしはへしとあるとまへしとあま
 日向月少のころやと天敷とにまへし一少物とほ
 地敷とにまへし和合し日向月と百初の内ふ
 まへしとあましとあはれ狂きとまへしとあま
 の親疎と隔をまへしとまへし次の日向月とあま
 用しとまへし格えと合しとまへしとあま
 ち日向月とあまの二候の地とまへしとまへしとあま

月夜より月と新奇と求ちとまへしと月むと内親の
 恒例ちるらり日向月と月夜合新とまへしとあま
 候式の能備とまへしと表とまへしとあま
 之舞も曲も地との様と一候の操おまへしとあま
 まへしと合持まへしとあまの地舞と儒行御家の
 一少をまへしとあまのまへしとあまの細五音也
 十善も清法もまへしと起空のほ格とあまの歌書まへしと
 一少の五義とまへしとあまのまへしとあまの割取
 一少のまへしとあまのまへしとあまのまへしとあま
 一少のまへしとあまのまへしとあまのまへしとあま

のほくまにむしりく連珠のふのちをり似て
今此能讀ふはまきりく海に鼻抜高は彼の
取を清く今この用は向むとあてりて古詩と
くし能されと昔昔の用とす用とと初年の人
よまらしはしてせはまらるあを月と花と
の詞のあやふれし今と治世は論一知一徳ふ
四寸の二端は擗のむしり論のむしりままふりて
擗おふあしとまや一旦のるをれをふれし今ま
張ふ家の式月と一た下通の増とふれしを擗
のふとのり大と雲とまはしはしはまきりて擗おと

決ま一しらふやけいふ今擗はまきり新紙の
大論ふりて此の裏評とにとあるし一世の裏評
いかくせよくあまらまらと百世の的也せはれ也
のたふしふしと所名の辨氣ふもりてく七句
目とすら句目此高句とりて空にれは例よらぬ
とまら分を月と花のたあまらとれは花と
の式と初ふ一しられと古式の表は句よら句よら
つらりらとせとをまらとをせ或は二卷の法式
しまらまらあれしまら秋のあまらと月此八面
せりまられいふまらまらまらとらやらぬまらせ

と月花の公武よりりて花と新田の大端りり
 月と公武の新規りりなるの儀なり軍卒
 うして世にま用を捨らりて遠く
 らとあさき近く海と露ありし住居のたふ
 へまかあらんちるを知らずの双牙とあら
 して凶虎の威とかりて草とあらんといふ
 へ實法の科もせりれ飛ねを接舌の四
 かふむんはしんかちりてまかた遺武の
 再撰なり

○ 指合と去嫌也事

右式と指合と去嫌とふとゆへに在月の言ふら
 ぬられと指合とふとゆへに在月の言ふら
 原物のおあらんちるれに各二角よりてせり
 服者よりその分あるをせ〇今指合に付は
 亦月とあゆむれ御筆と好りて連をよみ只下
 ある物と指合とふ言訓かりりて下とゆへに
 連をよみ家の割なりとゆへに方よりてせり
 してに指合の指合なりとゆへに第一とゆへに
 へ公船の艶詞とゆへに公船の中は公船と
 能後と下船の事とゆへに下船の中は公船と

暗くぬく袴着衣とまきまはけて能活の席の趣
竹ら集の折紙と牛とついでにやうなるもの同意に
ちるるて又う可のこころとあらうるも或いふと
事いふとちなるも所のはかひなくあつていふ
とやまの公卿とやうなる名應ふとついでに
の指合とついでにやうなる能活の信とついでに
ついでにいふとせぬとついでに能活のけりて連歌
のあつた能活とついでに久くある能活の艶詞とあつ
たれど又々との嬉々めと鄙談とあつたり戯言
とついでにいふとついでにの兵式とついでに謙言と

刺さるるやゆわくと連歌の心とついでに誹諧の詞
とついでにいふと水中央とついでに可下北喻とあつ
たらんや返るとついでにいふと能活と能活の
別合らるとついでにいふと八やと鄙談の互々たるあり
あつたらんやゆわくと能活と又百の戒律とついでに
ついでにいふとついでに能活とあつたりついでに打鼓
とついでにいふとついでに能活と例の世にありついで
指合とついでにいふとついでに

車を云ふとついでに指合とついでに連歌とついでに新所
の両式とついでに指合とついでにいふとついでに書付

三つねいせうなつこふ句ありてありて故より古語
 のあつらひとていふ字とひりし名とかりしこととを
 ひきとら文と採擷の常法なる也能得るを
 いふ事語のあらはれし語と擷の言と採ん
 ることありて能得るをいふことありて
 古語と用ひりし語とをかりていふことありて
 能得る事語のことたりと也
 一新物採用する Δ 撰云らるるものありて撰
 ることありて能得ることをいふことありて

採用の設より中を家と地より川と橋とをいふ
 二つにわかれし一十二所をいふことありて採用
 されしをいふをいふ例とあることあり也
 一 採り物する Δ 撰云前式より思慮のあり也
 ちりの中古此能得るもの然しその本し音訓
 かりしをいふことありて連発此とていふことあり
 と論をいふ事名同類 Δ 撰云よりいふことありて
 今此能得るの認めし同名異類の差ふことあり
 ていふことありとありていふことありて思慮
 思慮のありしことありて牛頭馬頭のかくらひ

る所をさし一けりよふに結すも能信の例の
 世法よかきも指合を嫌とほくあふとい
 五七の能信と業ヲとむ命のそと席と
 ほくわく可成の人心とあふとせよる信仰
 のは席とそあふ一又戒入常とまふおほく
 ちる付らほきたす用とあふ一今より世く
 の宗道達も連そ此式と信ふらるる一
 連そ此教とあふ一もまこと僧徒皆般提
 とし能信のそととふくまをせ

自守式りく二終

再撰自守式

日之記

念句此事

せしめく我々の意にてもと天の厚徳の朝より
 い布しめ事や我よほくつらう大和を此をこと外れ
 い代への帝に撰は果しとあふと都あといふ
 ありけり連そ此兩式より誹謗のちおよる
 けり一意の詞とあふのちやあふと句よりあ向
 けりよまらうと我あふと詞との一あふと
 けりよまらうとわらちおとすのよらあふと

○ 季とあると新とある物也事

むしり連記の式に序に可ぬの各とあるは
おとそ一各とあり一季とあるも同季といふ
又向去ありよりおれとせしこれに合ふも向
の言しある時もおれといふ今此能潜の春秋に
例のみ向去といふも冬といふも向去といふも
て各月の輕重を論するに各月自よとれは季と
ありて平向よとれは新とあるおありおれを
のし中に○まを季の業論ありてはまのや季

と教ふありし書字は子の影と文として鶉の業と
なあれと一水等の業といふも合ふなりと例の
浮業ハ新なりといふもさるる水等の業といふも
しるも川も業とされぬ水も行もさるる業
かゝるも新といふも季といふも用一をむしり
くも水もさるるも合ふとあれと例といふも
しるも各はうりの新也といふも鶉の野のといふ
おれおれといふ新といふもさるる向はるる例の偏
ありし季と鶉の業も鶉の業も鶉の業も新
あれと季といふもありし季といふもさるる例の業

と新とて。さうなをきらぬ。○さうと新日此
以燈より裕單物扇團扇燈水とむきあし酒と
共へて古抄よりさうなとせし水の清涼と新と
いへて詞もさうな古抄を汗と新とせしこれと
は各段向しとま向しとさうな解法の手話とあれ
これとと兩用の第一とさうな川持とて二名と流り
て中遊の對あれいさすも新も用へさ。○秋を
灯籠とふれありゆきとてさうな盆の年式とあれ
灯籠といひさうなとさすも新も用へ。○燈籠
も威放せとさうな秋とせとさうなと放とさうな

古今抄卷三

例の二用とてさうなに中遊とて子詞いさうな川持
の名れさうなとま向の新と句端とてさうな秋の
と用とてさうな例の冬議とさうなとせ。○冬と
團扇裏よりゆきとてさうなと古抄とおふとて
さうな貧富の兩用とてさうなとさうなとおふとて
さうな。○櫛とてさうな冬とてさうな山家此用とて新とて
焼火とてさうなとてさうなとてさうなとてさうなと
さうなとてさうなとてさうなとてさうなとてさうなと
さうなとてさうなとてさうなとてさうなとてさうなと
さうなとてさうなとてさうなとてさうなとてさうなと
さうなとてさうなとてさうなとてさうなとてさうなと

古今抄卷三

關し同抄も氣血の不足よりおあれりるを述べし
系湯者も物に雅俗のおしこり難く打さる時
にあし例の同をよとさるむしこもたれと破失
の虚実とつあや○今按するにけ武のいれをま秋
の例のごま句はたててま第の目まきこひは
あしるまをたおぬく一句ちるにまよひの
扇一むとく老人とさ蒲團は物ありくとしむ
し古おのび女情の用と今もまきこひ各目と破る
ぬまのしま此書よちる時おぬし今もまよひ句
よも用とまきこひらむらしあうらまもあしある

答也きよひの句よままよとさるるもかあき
右法の五句まよあしまよとさるる句も用は
ししらととしいれを難ありと打越しも同をよと
もまやうと今此漏えぬまよとさるる句も一
かひし古風の用法しゆりし破りし我家の賞罰
むらた代りしむらた家議とさるる句も世の
まよひるまよとさる也

○ 各取し新の發句此事

いしし和を此撰集しも新らふ部あれし新所

とらふとありて連能もも名と使へしを此能能
しとて海と新の舞向とさほくの用ひて
四季の節をよむ曲節とよみ一〇今梅もつた
石所し新の舞向とて一向よむ所の名とせし
その向系の情とくつてさるる昔季を然に
とていひ舞情にかみりてあつたるありしを
本誌のひかり

あまふらと能手つて海を片ん

かくとせられしかの浦らの舞情とせしを
そのおかりもせらるるつたつたのち武陸より

伊賀よゆりて馬の行轡うちかちて

かちあつてはつた坂と名馬哉

け時とるはれの人此節のさるる馬牛もある也
とてそのあぬ服もありてむらむら名の連歌
よはらるる此戯もつらむる名所の新いかく
とてとるいよこれおありしは源流よ次
あつてきくよむはり

かくはあり角ぬらとげよ次

け自ら花子よつる密解の両国とあひいよ
源流よはらむらむら行とては能潜の詞のそ

と扱てかくトわれへ御筆と書まふありて
次ニありし此用はあつとこれと新解とや
つむむ各取はけおし傳へるおありしりあま
あつと及つと又あると老懐の詩毫も

二年くや猿もさむる猿の面

け向らふりしと迎年のこととあつと扱る
歳旦の詞あつれいそと新解とやつむむ或は
可き季格とやつむむこれの新一といひ新解と
いひ可き季格といひ今の新制とてこれと今
の御筆の名目とていふこと也

蓮ニ云け照のおほむねい白馬の類説し相あり
て先師の遺稿もも散在たりてと也先師の人和
り御しつりありし軍書より芳野のふと子
向とて時のかりし難陳ありしと陳の詞も
故翁と富士芳野のふと對して我は一唱の
作ありしと貞室老人此とてとくと言ふ所を
はくさる各句中へむとおそろく此とみちりた
まふるとも家の山人とてとみちりし此の翁句
を序んんら跡と解しとる此とみちりし先師
いけ新と扱されしと誦し祖翁の詞と傳へ

富士と云とおもるく芳野と云とおもる
一むしう今そにけむの春とおもひたる
一能々の腕力をおもるく一むしうにけむせも
新、白も新、新も先師の遺行もあましく
中、樹、文殊のちよとて舞臺、あましく
くま、名、の、さ、也、意、の、山、け、二、句、と、笑、の、金、城
う、く、百、八、の、撰、集、一、け、一、や、新、之、都、と、ま、れ
一、う、ふ、草、と、天、の、橋、立、の、名、よ、あ、ま、文、殊、の、や、貴
と、丸、あり、せ、後、草、と、ま、山、と、ま、名、北、け、き、より

越中と謎語とふとる也但子果めらと越中
のまふといひおのおの湯殿とまふと飛おあ
くも集よと意と部ありて一海もまふ
もあま一棉草、ぬとまふと後と意のこり具
け二句よと部ありて一あ、ち、女、意、とありて
先師の句あり後、傾、城、意、とありて秋、と、坊
作ありて集、の、部、ま、ら、右、と、集、よ、あ、ま、一、坊、
これ、と、御、指、ま、此、仲、ある、一、お、あ、く、新、之、部
の、あ、ま、い、一、樹、よ、ま、る、事、想、と、あり、て、一、そ、ま、ま、か、
ける、と、御、子、彦、の、と、詠、あ、ま、一、う、こ、と、ね、よ、あ、ま、と

トセざるのしきさるらる作の形容あるしも世
ノ例の衆議ありて新解の一格とあるなり
まゝに衆議永の初比ある湖南の新書山
今ありて七浦や一子の記と一子はくとも
衆議ありし時の口評より比我門の能事
各射し新の例はあれとされしと新書
かくく評して新解し何れもけ向らし時
こそも子批服と比けて口評格もつと一子
はれと衆議の減後よりくしひくぬ新解
あれは駿と空りよりあるんを一子批

衆議より今日の様おとらんとし尊の服
より評しけ解しやあるしと也▲之授
まゝに先師の没後新書も子も空かく
おれしの議論も和らる中より名もあし長良の
特川宮より口評の特解より衆議とえぬ
衆議、新の特解ともあるし引かれしも
くまゝに世の勢の子裁 蓮二しかくら
はれと角ひ之いけ記し新の特解も新記
飼字のまことまよ時とかくるなり新
まあるしかくしとくし口評の衆議あり

の附合を繼としていひつけりてありの用とある
 物名もあまこふれい今世能潜は用なき物と
 時代の用捨にやうきとまてしやけなけりて
 古今に論ある物とあけて今替の事と加へ
 一也移らくら我門より達の人ありてけり
 名れと凡例とあり正月より十二月は時日
 まく彼り小噺竹と用たりて季細の事同じ
 あくもやとせりけり式の制表もるありて或
 とも秋冬より二季の間よりきくもの地い多き
 とるより少きを加へておれと今式の加減と

とい或を鉢裏と江陀といは良者と服部とい
 おとたれと今式の備わりとい或を新舊表と
 袂とあり花は時多とまきとあるハおれと今式
 の割取とい或を古おのすし用と替へ今式の
 有用とあるおれと今式の蓄用といり今表を
 新故のきくといして例の古式とわくといは
 くれくと温故知新とやりよまきはらくといは
 連五平の両式より兼載京祇の控といは
 申して紹巴の又百ヶ條あり常書をあけん
 事よ書をほくといは同じ耳ふおぬかかん

又千系一斬の解ありて一即下通のるをさる
何のなるべきはあらん何の向きなりあらん
一部の凡例とさるべき也二之子てんもの跡と
さるべき能諧の例の事詠ちりりてなす
の衆評とさるべき世よ人の衆議よりせ
まむく此用とさるべき也

○春之部

即御食

世名ハ陸節ノ御食礼ナリト云フ故ヨ四月ノ初御食
ヨリ節事氏節人氏御食子ノ田舎ノ俗習

ナリ或ハ二節ト云フ詞ハ禱之儀ノ儀儀ヲ止テ
臨時ノ遊ヲ云フトソ或ハ朝御ト云フ詞ヲ二節ノ
人ハ節ノ詞ト成ル世等ノ俗習ヲモ知平ナリ本
ヨリ能諧ノ世法ナル諸國ノ俗詠ヲ知尺又ハ

決雪

世名ハ古今ノ論アリテ大昔ハ春ト云ク中昔ハ
冬ト云フリ〇今接スルニ決雪ハ冬ニ用キ所以
ナレ雪ノ班ナル形容ハ初雪氏云ク薄雪氏云ハ
春ノ雪ノ平白ナラシモ日影ニ散リテ決雪ト云モ
寒ノ氣ノ決和ナル故ナレハ決雪ハ決レテ春日ト定レ
世等ハ例ノ加減氏例ノ當用氏云キナリ

雪解

竹詞ハ古式ヨリ解ルモ消ルモ春ト成セト雪
 消テ氏消カニ氏朝夕ノ日ニ結ヒ洗足ノ湯モ
 結タラニ頑ニ春ト定メハ冬ニ用キ詞ナクテ附合
 ノ害ト成ル時アラシク夏ニ解ラ春ト成シ消ルヲ
 冬ト成ス時ハ消ル物ニ敵シテ消ヘ解ルハ我ト解
 ル故ニ冬ニ春ノ道理ハ明カニ詞ニ用ノ自在ヲ
 得テ此等ヲ當用ノ働トヤ云ハシ去ト冬ニ解
 ニハ断ルニ及ハス

陽炎

此名ハ古式ヨリ新トアリテ諸抄ニ色々ノ説アレド
 燃ルト詞ヲ添ヘス氏決シテ春ト定ヘキナリ鯨魚

稲妻ノ説ハ連身ノ用ニシテ蜻蛉ノ説ハ雙子ノ
 沙汰ニヤ○今拵スルニ物ノ散回ハ毬羽目ノニ子ヲ用
 テ同訓別用ト成スヘキナリ毬羽ハ木サ陰ノ毬羽ヲ伝
 習ハフヒノ田各語ナリ或ハ耻習ト云フ類ナリ然レ
 ハ散回モ群^{ムラツク}尽クモ散乱ノ助語ニシテ和漢ノ通用
 トハ此等ノ為ナリ或ハ在子ノ野馬遊糸ヲ引テ
 遊糸モ陽炎モ同意ノ説アレト漢語ノ遊糸ハ倭
 語ノ用ニ非ス増テ野馬^{ヤマ}ヲ以テ野馬^{ヤマ}ノ説ハ何ノ俗習
 ニヤ論スルニ足ラス或ハ糸遊トハ湯桶訓ニテ和訓
 モ例ノ覺束ナク糸遊トハ連歌ノ詞ニテ何レモ

若葉

古式ニ木ノ若葉ハ夏ト成シ冬ノ若葉ハ春ト成シ青葉ハ總テ新ト成セルナリ然レテ或抄ニ花ト若葉ノ二所ニ若葉ニ花ヲ結テハ春氏云イ夏氏云ル何故ニ決テ又ヤ○今按スニ月花ハ凡雅ニ一巻ノ飾ナレハ踏タレ物ハ加減シテ四季ヲ自由ニ配一レハ若葉ニ花ヲ結テハ決シテ夏ト定一レ○猶按スルニ世配ハ花ハ春ナリ葉ハ夏ナリ實ハ本ヨリ秋ナレラ其葉ニ若ノ一子ヲ結テ若葉ヲ夏ト成セルヨリ若葉ノ春ナル道理ヲモ知レ然レハ花ハ春夏ニ跨テ花ニ郭ムヲ結タルトハ入遠タル働ニ世等

ラ加減ノ機ニ夏トハ云一キナリ

残花

世詞ニ古今ノ論アリ然レハ残字ハ其季ヨリ世季ニ残字ハ残ト云ル道理ナレ花ハ本ヨリ春ニ決シテ残ハ夏ト定一レ惣シテ残葉残葉ノ類モ古式ハ一様ナラ又故ニ汁只ハ十色ニ意兼テ百世ニ論ノ断ル時ナレ譬言ハ残葉ハ重陽ニ残レハ残葉ハ何ニ残レキヤ残字ハ總テ其季ノ次ニ取りテ世論ヲ残字ノ例トスレ秋冬ニ部ニ奉ルニ

牡丹杜若

世ニ名ハ和漢ノ遠アリテ詩ニ牡丹ヲ春日ト成シ歌ニ杜若ヲ春日ト成セト中古ニ誹諧ノ加減

ヨリニ各ヲ其ニ用スニ初夏ニ花ノ少キ故トフ

松竹落葉

古抄ニ松竹ノ落葉ハ雜ナリ常盤木ノ落葉ハ夏ナリト云レト松竹ハ何ニ常盤ナリト云山館

ノ白情ニ殊ニ面白キ物ナリニ昂ハ決シテ夏ト定ムレト去レト落ルトハ詩ノ詞ニ散ルトハ大和ノ凡雅ナリ群鳥桐葉ノ重ク落テ徳散ル事ニ非ス多ニ姿情ノ論ヲ知ラハ千式万法モ多ニ明ナルレ

水芙蓉

此各ハ新撰ナリ芙蓉ハ和漢氏ニ秋モ部ニ入レト水芙蓉ト云フ時ハ漢ニ蓮ノ一名トワ然レハ傳ニ和ケテ水芙蓉ト續ス凡芙蓉ト云水

ヲ結スガ散ルト云フ詞ヲ添テハ決シテ夏ニ用ナリ秋ノ芙蓉ハ陸ニ咲テ凋テ散ラヌ物ナリハ其類ヲ句作ノ凡例ト成スキナリ

老萱

此式ハ全ク新撰ナリ然レモ老萱トハ本ヨリ漢家ノ詩ニ出テ或ハ狂萱氏乱萱氏總テ夏春ノ物ナレト例ニ今式ハ加減ヨリ残萱ハ勿論ニテ老萱モ夏ノ名ト成寸ハ萱ニ老ノ感情アリ曰雅ハ例ノ麻敷味ト云ハ此各ハ夏議ニ據ルナリ

萱附子

此式ハ例ノ當用ナリ○今按スニ萱附子ハ春葉立テ夏詞ハ六月ノ間ニ毛ヲ替目テ冬

至ノ比ニ鳴習フ故ニ管ノ子ニ鳴字ヲ結テ冬季
ト成セリナリ然レハ管ハ向習ニテ或ハ引鳥ノ
親ニ附ケ或ハ笛ヲ以テ引音ヲ教ヘ管古ハ管
ノ向ナレハ附子ハ決シテ管ト云イ笛ヲ結テモ管ト
知シ月星日ナリト引声ヲ取上ノ管トセリ

鳥巢

鳥巢ニ鳥ト都鳥トナ加テ水鳥ハ總テ冬ナレト
世ニ鳥ハ歌道ノ秘古ナレハ管ニ記サスト書捨テ
例ノ子細モナク報ナリト云一リ〇今持スルニ都鳥ハ
指テ能語ノ用ニ非ス増テ秘古ナレハ論ニ及ハズ
ト云イ路ナト云ルハ本ヨリ水鳥ノ用アレハ管ホラ結テハ

管ト決スレ然レニ鳥ノ浮巢ト云ハ古式ニ新ト成セ
夏ハ水中ノ管ニ巢ヲ擲メハ水ノ増減浮沉テ四季
モ其後ニ捨置ク故ニ道理ヲ附テ報ト成セト鳥
右巢ハ總テ去物ニテ其巢ヲ掛ル時ハ管ナレハ
浮巢ハ決シテ管ト定キヤ巢ニ用ナキハ向作ニ
依ルレ鳥ノ別名ハ冬々々部ニ論アリ

翡翠

翡翠ハ詩ニ名アリテ古抄ハ渡鳥ニ入タレト云ノ各
川ニ木陰ヲ傳テ決シテ管ト云シ川鱗ハ傳名

沖鱒

沖鱒ハ俗習ナリ或ハ海邊ノ別名ナリ或ハ船遊
ノ時ニ魚ノ新敷ヲ称スレハ決シテ極暑ノ各同

ニテ此等ヲ例ノ者莫能ト云キナリ

反

此ニ只ハ常家ノ式目ニ多クハ秋ノ季ト成セルハ
察スルニ此ノ字ノ惑ニヤ夏ハ涼ヲ好シ秋ハ冷

ヲ惡ム天地自然ノ道理ニシテ此等ハ夏ト決スレ
物ニテ古今ノ遠トハ天理ノ妙女情ヲ論スシテ文字
言語ノ各ヲ認ル故ナリ是ヲ千式ノ凡例ト知ナリ

○秋ノ部

花白田

佛舎ニ正花ナリ春ナリ細ニ穿テ段屋スレ種
ノ理屈アルト此分ニテ置カ能ナリト云ハ如何ナル

秘古スニヤ知ラス○今採スルニ花壇モ花畠モ決シテ

秋ニ定キナリ花園ト云ハ竹花ニ似タシ花園トハ

仰向キ畠トハ俯向ク多ク能諾ノ次ナト云テ種々

ノ理屈ハ今ノ用ニ非ス此等ヲ今式ノ有用ト知レ

桂花

此名ハ今ノ常用ナリ古式ニ春ノ季ノ説モアルト
地下ノ桂ハ花ノ角ナリ和歌ニモ月見ヲ讀ムル

例シテ月ノ異名ト成シ秋季ト定ルハ勿論ニテ

四季ノ詞ヲ結フ時ハ四季ノ月ニ用キナリ然レハ

有明既望ノ名ニ例シテ日モ星モ二句云ク植物

ニモ二句云キナリ

鳥籠橋

古抄ニ生類ニ非スト、如何鳥ニ句去キリ

鳩吹

世詞ハ種々ノ説アリトキヲ吹テ鳩ノ真似ナリ

紅葉散

世詞ハ古式ヨリ且散ヲ秋ト云イ散トハカリヲ冬ト云レト花ト紅葉ハ春秋ノ艶色ニ

花ノ散ルモ春ナレハ紅葉ノ散ルモ秋ノ苦ナリ増テ

冬散ル木葉ト云イテ枯テ色ナキヲ用トセリ世等

ヲ古今ノ用捨ニシテ例ノ且字ニハ及向敷ナリ

柏散

世柏ハ傳々ニ説アリテ論語ノ松柏ヲ證文トシ

ノ事免ハ新ト成セシト多ニ散字ヲ結テハ決メ

秋ト定ヘキナリ○今按スルニ論語ノ松柏ハ松ト柏ト

常盤木ニヤ然ルヲ六書正諺ニ柏字ハ柏字ノ俗書

ナリトヤ去ルヲ大和ノ俗習ニ柏ヲカヤト訓シ柏ヲカハ

ト訓シテ世類ノ正俗ハ教多ナレト知テ誤ニ從テ

固凡ノ故實トハ云レ去テカラ爾報ノ註ニ榧有テ美

實ニ而如栢トアレハ倭モ榧テハ榧字ヲモ用ス榧ト

栢トハ異字同訓ト云レ或ハ傳々ノ説ニハ紅葉也

故ニト云レト桐葉ハ紅葉也子氏和漢通用ノ秋季

ナリ物思シテ我家ノ真名遣ハ新字俗字ノ二論

ヨリ古今ノ兩用モ正諺ノ二様モ能證ハ例ノ俗習ニ

從テ今日ノ用ヲ去テスヘキナリ

椎裡栢

御筆ノ椎下ニ紅葉セ又木ナレ氏推トカリモ秋
ナリ或ハ葉モ世木モ秋ナリト云テ秋ニ用ル子細
ヲ叙セス然レハ栢ト入遠テ彼ヲ新トシ是ヲ秋ト忠
百世ノ惑心トハ世謂ナリ○今按スルニ推モ裡モ栢葉ノ
名類ハ全ク紅葉ノ沙汰ニ非ス落ルトカ拾フトカ
實ヲ結テ秋ナルヲ蓮實ヲモ甘芋ナリト云レハ古抄ハ
如何トモ其故ヲ辨ヘス

新茗高麦

世式ハ例自賞散ナリ奈何トナレハ苜ハ冬ニ
テ食フハ秋ナル前後ノ働ヲ賞テナリ去レハ
茶ヲ摘ムハ春ニシテ新茶ハ頂次ニ甘夏ト成セル蓬速

ノ用ヲ知ル時ハ孔子ノ宣給フ不時ノ誠モ其時其物
ノ程ヲ知テ分外ノ珍奇ヲ好カレトフ

初鴨

世名ハ全ク新撰ナリ或ハ賞散ニ加減トモ云ハ
○今按スルニ奉膳亦ニモ一鴨ト並ナカラ賞スル
所ハ秋冬ノ一差別ナリ去氏見向ノ娯情ヲ論ハ初
ト云ハハ雅ヲ思ヒ初鴨ト云ハハ凡味ヲ思フ多シ天眼
天耳ト云ヘリ辟言ハ初ト音ニ喚ル凡味ヲ先ニ思フマヤ
鴨ノ冬ナルハ勿論ニテ初字ヲ添テ秋ト成スヘケン

野宮別

世式ハ林中ノ行事ニテ古式ニ世類ハ教多ナリト多
連歌ノ用ニシテ俳諧ノ平語ニ通用ナラシ然レ俳諧

ハ下學上達ノ道ナレハ多シ世等ノ一各ヲ奉テ公ニ承
 服上ノ礼例ト成寸ハ四季ニ世類ノ各ヲ透スクリテ作語
 曲節ニ用ミトナリ去ハ野宮ハ漢詩ト賀茂トニ在リテ
 伊勢ノ赤南宮ニ移リ玉フヲ野宮ノ別ト云ハリトフ去ハ
 羅旅ニモ哀傷ニモ非ス増テ意無常ニモ非テ哀
 ナル詩也モ多ケレハナリ

○冬之部

枯尾花

世名ハ古今ニ論アリテ秋に云イ冬に云ハト枯尾花
 結テハ冬ト定シ其故ハ名ニ枯ルヲ冬ト成レ

残葉

名ニ本ノ散ルヲ秋ト成セル散ルハ名アリテ枯ルハ名ナキ
 故ナリ然レハ名ニ草モ其例ニシテ枯尾花ハ決シテ冬
 世亦ハ諸抄ニ論アリテ傳筆ハ重陽ニ残リテ秋
 ナリト云レト桃モ草モ其類ニ非ス然レテ和歌
 ノ公亦ニ十月五月ヲ以テ残葉ト云レハ官字
 ニ及ハスレテ決シテ冬ト定シ世等ヲ加減ノ用ト云
 ハン残字ハ總テ残花ノ例ニ效レシ

作鳥

世亦ハ全ク當用ナリ古抄ハ秋ニシテ雁鳥部
 ニ入タレト山雀白雀ノ類ニハ非ラテ作鳥部
 物ニ連ニス民家ノ軒ニ馴テ馬防ヲ傳ヒ水棚ニ

遊ユに声ノ清スく冬ハ殊更ニ寒シレ増テ春歸ルル次女
モ見子ハ決シテ冬ト定シレ此等ヲ姿情ノ例ト云フ

木兔

木兔ミツツモ例ノ新撰ナリ古抄ハ秋ノ部ニ入レト彼鳥
ニモ非ス名シ鳥ニモ非ス増テ鳴クノ物ト云フハ實ニカラ層イ

一レ故ニトヤ然ラハ二季ノ加減ト云フイ夜鳴ク鳥ノ當用ト
云フ決シテ冬ト定シレ或ハ鳥ノ部類ト云フ新ト成セル
ニ用アリテ此等ハ古抄ノ女ノ覺ト稱スレ

鶺鴒

鶺鴒ハ倭名ノ火燒ナリ然ルラ古抄ハ渡鳥ノ部ニ入レト
ト其名モ其言ノモ朝霜ノ氣色ト云フイ秋ハ小鳥
ノ多クケレハ冬ノ部ニ跨リテ此名モ加減ト云フナリ

鳥

此鳥モ論セハ新撰ナリ御筆ハ鷓下ニ鳥ト都鳥トヲ
加テ新式ニ雜ト云フ歌道ノ秘トナリト至リテ例ニ
其故ヲ曉サ子ハ今日ノ用ニ立テ難シ○今梅スルニ路鳥モ鷓
モ水ニ甘ク冬ノ差別モ通レハ果ラ結スハ雜トモ云フケ
レト鳥ハ鳴ク声ノモ寒ク氣ニテ俗語ニ搔カ井ノ云フナレ
ハ能ク諸ノ名目ノ自在ヲ稱シテ冬ニ用アラハ冬ニ
用キヤ然ラハ路鳥ノ部類ニ勝リテ例ノ雜ト成リ
子ト成リテ附合ノ當用ト云フキナリ

鶯子

鶯子ハ古抄ニ歸ル子ヲ結テ冬ト成セレトモ
鶯子トハ名目モ長ケレハ歸ル子ナクハ冬ト定ム

一レ彼ハ冬至ノ此ヨリ鳴習フ故ニ其子ニ冬ノ用
 ハナリ増テ學身ノ母鳴ト云ハ子ノ子ニモ及向敷
 仕名ハ俗習ナリ鴨ハ佳来ノ道ヲ定テ山ノ尾端
 ヲ越ル故ニトワ然レハ初鴨ヲ秋ト成レ鴨
 ヲ冬ト成セル各ハ殊ニ能諧ノ用ト云レ

尾越鴨

綿入棉打

古抄ニ綿ノ夏ハ分明ナラス或ハ真綿モ木棉モ
 總テ冬ナリト云レト去ルハ附合ノ害アリ綿
 ハ本ヨリ類ニシテ綿ハ綿扱ノ對ナレハ入字ヲ添テハ
 冬ト定レレ或ハ棉打ヲ秋ト云レト綿ヲ摘ト云イ
 棉ヲ打ト云フ打ハ木棉ニシテ決レテ冬ト定レ

棉取新棉ノ外ハ秋ニ非入或ハ綿帽子ハ衣類ニ
 非スト云イ綿ニ海風腸ヲ嫌フノ類ハ古今ノ透
 ナレハ論ニカハス然ルヲ綿ト木棉トハ附テモ昔
 カラスト云テ琵琶綿ト木棉トノ類文アレト綿ト棉
 トハ莫堅切ニテ音訓ニ疑日ラヌヲ何故ニ附向ヲ
 嫌ヌヤ古抄ニハ類アリテ皆々論スルニ暇アラヌ
 多ニハ綿ノ一名ヲ舉テ一方法ノ例ト成サハ其外ハ
 推レテ知キ古又ナリ

山路塔

仕名ハ古来ヨリ論アリテ歎冬ハ山山路ニ
 宛在ナレト和歌ノ題ニハ山吹ニ用事ナレハ頓

テ大和ノ故實ト成レリ然レハ中古ノ式目ニ露塔
モ露花モ同ク春ニ用タレト世各ハ例ノ高見歌
村脩ノ雪ニ結トモ露塔ハ冬ト定レ然レトモ
露花ハ漢ニ高見鴻カ春自雪ノ詩ヨリ春自ト云ハ
モ宜ナレト其各ハ指テ世語ノ用ナシ露塔ハ但
春ニレテ一物ニ用ノ例ト云キナリ

冬瓜 世各ハ世語ノ自在ニレテ冬瓜ト春ニ喚ビ或ハ
カモフリト訓ニ喚テ中右ハ總テ秋季ト成セリ
去レト幸ニ冬ノニ子ヨリ霜ヲ待テ賞スル物ナレハ
西瓜ヲ秋トセル加減ヨリ冬瓜ヲ冬ト定レナリ

雪海

世各ハ俗習ニレテ或ハ加減ト云キナリ世物ハ
北越ノ各産ニレテ海鳥ノ岩間ニ降積タ
ル雪ヲ波ノ打浸ス柏子ニテ凝テ海世ト成レリ
トフ然レニ雪ヲ里ト訓セシハ白ヲ青ト云レ美訓
ナラン〇今接スルニ海世ト各ハ春甘夏ト復タレハ
雪海世ト以テ冬ト成サハ例ノ変誤ニ及ハスレテ
世等ヲ加減ノ當用ト云レシ

大根引

世詞ハ冬ノ當用ナリ大根ト略シテ音語ニ
讀レシ京家ノ大根引ニ效フ一カラス牛ノ房
モ同シ各類ナカラ引ト云ハスレテ堀ト云フ其各

八秋ト知キナリ○今按スルニ侘諧ノ式同ハ新式ニ據
ラス古抄ヲミ巡ス今日ノ世法ニ遠キハ其ハ座ニ臨ミ
其時ニ從ヒ其故ヲ論シ其後ヲ明メテ自己
ノ理ヲ屈ラズ在サシハ其ノ所ヲ一世ノ會ニ議ト知り
其ノ所ヲ百世ノ明監ト知キナリ
東文ト云ケテ式ノ論用ト始メ節次食の公式より
終メ大根の條習よりおのれに十餘條あり
一或ハ連音の有用あり 侘諧の可て用キ
一或ハ古今の遠同と云ナリ或ハ季節の
加減と云ナリ一季竟ルケテ式と云ナリ 千式

一方法の凡例きくんニ我々をくんと 侘諧の微中
を失フと一季万通の機変よりけ式の序詞
よスるる遠の人と云ナリ一て季一く四季の
名れとありいさく 侘諧の誤不誤ト侘諧の
用可て用キも海ケケ式と格削して自己の理
をいふもきくんよる百世の感と云ナリ

○ 侘諧ノ假名はくひ此事

大和ノ假名遣ト云ナリ定永々の物教
てし作らるる法ありと云ナリ書ハ紹巴の

字があるより一文字の比北扱れありと我もさるると
 世くはつひさねて或を故実とすふ扱ありて志不
 と志と此ときも撥字とをさるへしあひの假名
 あるより一庵字より類字より音とをねれい訓
 かの字や志とれより何故と捨れいあひの字は治
 ちちや字書と志とをいかにとありあひの字を
 歌書の扱教奇より一例の及る理あると故実
 とも或を口傳とすふ扱ありて字とをいへあひと
 ともあひの字とす法とをい法とをいハホハ
 かり通言より一入音とをさるへしあひの字とれい

あひの字とすふ扱ありてとれとあひとす物名
 てもあひの字と調のやうきとれいさあひとす
 此ときも假名の剛柔とあるべきやせはつと
 へふの軽重より一此ときと口傳とをいあひとす
 假名遣の字竟と書法の字形と音韻の軽重
 とけとあ用とるさるへし余をけ例と考へ知
 但し假名の軽重とを白と黒と
 重と黒と角と點より二様と平仄の相紋也○今接
 くらに假名の書法の連能の字とをいあひて連音
 假名からに能階と真名からとれい假名と

真名と此配とを辨るにふのふある一也とい
いあつふとむしむせとき假名ハせりふ此字を
しらるゝと假名書の手文とるる也。書法
の字は形かくけぬれいあはれとむしむ。とちまて
をとりまてりてはけり。定む。例の
故あるは似たり。假名ハはるる。様。家
の口授と知りまて或は文句まるる。様。家
ちり。みる。やま。信。能。或は言諸。能。ま
て。ちり。能。て。を。結。て。ちり。ちり。と。ちり。
の信結。お。け。れ。と。ま。る。る。子。名。の。ち。り。て

字假のちりて考一。流るるある文ると言はれ
に同訓異用の假名遣あり。上は月の中。下は
下は月の中。お。月。中。假名遣のちり。と
いひぬ。いとけは。え。つ。ち。の。ち。り。て。子。を
新制のちりせ也。て假名遣のちり。の。ち。り。の。ち。り。
と。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。
の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。
と。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。
例の明。例の明。例の明。例の明。例の明。
て。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。の。ち。り。

と子と假名も又向と言語とに動く
 動くぬ款ありて物名とよき處を動く
 へ鯛鯉のれとつもの字やまうへは鯛鯉の
 ねとお外く物名あれと假名もるを
 次子名とつふはありて其字をあふいと
 べきとあふまうへは動くとあふまうへは
 辰吉の次子名あり離れぬかふの假名
 あれといへる音書の次子名あり但し
 次子とて歌書より離れとおとるれ世
 みのとあふまうへは中めとあれとおふま

れとおつのつやとつん假名も動くと
 動くねをけおま教ふあれと言語と動く
 又向とあふまうへは動くとあふまうへ
 のこしとても余しけ例とあふまうへは
 下の五品は古書の假名はつひと散在
 へ今つねまうへはなまうへは假名
 けつひとおまを又向と言語とに動く
 と動くねと或は音と音とねと或は
 上中下と用ると或は押重と多心後と
 或は口傳と故実とやまうへは假名はつひ

の事竟と和歌の撰集と武家の軍書
と假名と直名と此をさうしり假名は
はくきくと才とてしよあると其書の用
あれいよ一ゆめしと漢やまかんにあり
まろりと今此は物ありと万葉假名と
かこいりひらくあまく直名とをわらぬ
又一子う二字よこしぬれいあといえぬ
とまふはて風雅を吹声の感作れ
いふよきふわうい洞しとわられしと
まねし能書の家よけれと隼鷹子

○
○
と
不

の風流よりあつにおひさくいよあわらる
はそりの好愛と撰集よるるくす
此は治と隼鷹いさるるすなぬ也律とけ式
の可啼るる圓角の二紋と軽重とま
むれいす文百字と此例とあまかといふ
せくといひかたねともお月と多岐の
まといあんとくれい自撰の要とよ假名
いよあれと用とつよ一發百中の的語と
通とま。 精とま。 直とま。 蛇とま。 けれいぬ也

蓮ニ云世ノ假名はくひとふりありて古名
はくひとふりしれりしと新制あり
らるる假名直名はくひとありて大和詞ノ
助語とやうけて能階ノ文章此才に條と
ふりまくり△之後もらんけ温鯛を秘名
の遺稿ありて彼ノ五秘の一字をむし
え祿甲成の秘とや伊賀北西藤庵より
後藤某の撰集のたゞしに直名なめり
稿とまくりて十第篇の註換ありて
前藤某の直名文より幻住庵記より

急三^{クミ}楚^シの文論ありて略云我が所て能階
の文章と和歌連音と并ありて家と格
あんととふくは漢と四六の文にありて拍子
ハ律ノ階秘音ありんまうれハ能階の平話あり
例の直名はくひとふりてまうれハ能階此
形容ノ上ハ鮫^{トシホリ}の羽の如く下ハ鰭^{トニキリ}の腹
ノ如くうらとと和歌もあつて連音もあつ
まうれハ新制の源氏袂衣の豊語あり詞と
似ハ似とんまうれとも今此文論ノ直名はくひ
返り返りぬの差ふあれいきてハ可自の詞

の古きものやいふまゝにのれぬものも
例の字も名の二字をもきくまゝに
御人より世よりいふ書林といふ
しるしに儒佛の遺書もあつてその
位とらへてその中より其の奥に
遺稿とて下北密議とてやまゝ
廣狭とて御神とて大才子の
ひらからし書とて七十一
まゝに遺書の虚実とて例
おそれまゝに今北式目の
角撰とて三校い

ありて密議とてまゝに
はらひとて和漢の助語
とて直名とてまゝに
格とてまゝにけり
とて和調とて助語とてまゝに

貞享式目之終

他諸古と抄巻之中

再校タヒスル十箇條序

蓮二之序

蓮二かくくけぬ今子拾遺十箇條の
むし祖翁の口誡をばかりて永く祖子庵の
秘稿とをく祖翁の滅後二十年ありて
いそぐれ白馬持論をありて近く我らの
家評とをく遠く天下此家議を究観す
欺く者あれは秘小者も阿れはる人おれ
控る人れまをくをく祖翁の秘記の

此節の辭習此法くるぬある一し去るれども子
 貞字式之春秋一文字此處表貶とぬくとも人
 才醒才醒あるんよけり十箇條一在傳の耳と
 かくむけり一箇字知の教文ある例一文字此處
 ともあつて百世にけりたの鑑あるんよせけぬ
 け一冊の目錄今ぬ例と加して我子けおの
 中巻とをあるり例一視義の口誡とおそれ例
 一先師の之也とあるんやんり人しけ序よ
 照おふよ

字保己 酉之月中浚

十箇條目錄 並凡例

古法可有取捨事

- ▲杜鰐 ▲浮見竹 ▲柳 ▲櫻 ▲萱 ▲螢 ▲杜若
 - ▲芭蕉 ▲鰻牛 ▲鶴鴒
- 此十及八象物ノ數量十ナリ
 古抄ニ此類ヲ言訓ニ缺ナリ
 異名ニ呼ナハレ居免タレト今ノ能讀ノ式目ニ座ニ只下
 定ナリ古今ノ取捨トハ世謂ナリ 右ハ十及ノ各目ヲ奉テ
 万物万象ノ凡例ト成セナリ 但ニ柳櫻萱螢ノ四及ハ
 花鳥ノ段ニ教文アリ 異名異射ノ差別ハ首巻ノ凡例ニナリ
- 去嫌可有野敵事

△父母△男女

世四只ハ人倫ノ凡例ナリ
ケ類ハ二句ツク去キナリ △主△誰△身

△独△媒

世五只ハ人倫ノ嚮ナリ人倫ト
定テ指合ヲ釋ルヘカラス △僧△寺

二人倫ニ非ス居テニ非スト △親王皇女△天皇皇天女

△帝御門△仙洞新院△鬼仰

世十只ハ古式ニ色々
ノ説アル人倫ニハ

二句ツク去キナリ御門
ハ居テニ二句去キナリ △石菜△新公△松虫△水仙

△水鷄△之月月△尾上

世七只ハ會目主息ノ各目ヲ決レテ
ニハ有ヘカラストナリ會意トハ

ニ字ニ字ノ意ヲ會テ其各ヲ作ル
故ナリ字ヲ造レルニ六書ノ一名ナリ △雪△雨

世八只
ハ雪四雨ニ下 △魚馬車△飯餅茶酒

世八只
ハ日用ノ物ナレハ一座ニ △松ノ子△月ノ更科△花ノ野

世二句ツクハ有ヘキナリ
世三只ハ連テ齊ノ御法ニ
シテ俳諧ノ象ニ論ナレ △鐘△鉄將△瓜木△妻女

△歎△木△條△依△々△四維△ひまの扉の首△水追

△山依△山麩夜分

世七只ハ古式ハ嫌物ト下
今式ニハ御法ナレ △扇△御

△送△火△轉露珠△眠字△起字△虫石

世八只
古式ニハ

ニ夜分ト定レ任今式ニハ夜分
ノ意ニテ指合ヲ釋ヘカラス △冠△鳥帽子△綿△本棉

△夕立△雲△雨△笠△扇△持

世五只ハ古式ニ附向ヲ
嫌ハスト有ヘト今式ニハ

嫌ヘレ總テハ
古今ノ違ナリ △尿生△師走

世二只ハ古式ニモ異各ノ月ハ附ヘレ
トウ打越ヲ嫌フハ好レ古今ノ通ニ

△山降△山嵐

世四只ハ凡例ナリ總テ天象地形ヨリ能登ニ屬
復ニ至ルニテ字類ヲ以テ例トス一理万通ノ故ナリ

指合可有ニ分別事

○連○而 世二只ハ手合波ノ御法
ナリ本文ニ分別スレ ○社○多○あり○比○多○あり

○不_レ多_レり_レ○_レて_レ多_レり此四品ハ古式ニ大夏ト○之_レ字_レ假_レ名レ氏今式ニ子細ナシ

○五_レ字_レ假_レ名此二品ハ古式ノ名同ナリ○老_レ○親_レ子此二品今式ニ此等ノ字ナシ

○鳴_レ子_レ○網_レ○花_レ鳥_レ繪_レ○花_レ櫻此二品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠同

○楓_レ紅_レ葉此五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠同

千_レ句_レ有_レ一_レ物_レ之_レ事

●鬼●虎●龍●女此四品ハ連能ノ差別ナリ新式ノ一座一旬ト云フ所ニ凡五十余名

カレ_レ氏_レ多_レハ連_レ能_レノ用_レニ_レテ_レ能_レ諧_レニ_レ不_レ用_レナ_レリ去_レレ_レ氏_レ此_レ四_レ品_レハ佛_レ會_レニ_レ敵_レテ_レ能_レ下_レ詠_レト_レノ_レ差_レ別_レヲ_レ云_レリ今_レ式_レニ_レ異_レ射_レノ_レ数_レヲ_レ定_レス

花_レ鳥_レ有_レ二_レ物_レ之_レ事

柳_レ櫻_レ厚_レ風_レ鳥_レ八_レ象_レ千_レ鳥此七品ハ古式ヨリ一座一旬ノ物ナレ氏花鳥ノ二品

ハ_レ四_レ花_レハ_レ月_レノ_レ賞_レ觀_レニ_レ效_レヒ_レテ_レ一_レ座_レ三_レ旬ワ有_レキトナリ花鳥ノ名ハ代々考_レレ

紅_レ梅_レ緋_レ桃_レ梅_レ櫻_レ紅_レ葉_レ山_レ吹_レ入_レ郭_レ云此八品ハ花鳥ノ中ニモ只一旬ニテ

二_レ旬_レハ_レ有_レ三_レキ_レ物_レノ_レ凡_レ例_レナ_レリ此段ノ詮用ハ二旬有_レキ異射ハ

日_レ用_レ可_レ輕_レ物_レ之_レ事

○昔_レ曉_レ○_レ候_レ垣_レ○_レ袖_レ襟_レ○_レ湯_レ汁_レ○_レ文_レ仗此十品ハ天象地形ヨリ

食_レ服_レ等_レノ_レ凡_レ例_レナ_レリ此類ハ總_レテ射用ノ輕重ヲ知_レレ

○_レ眠_レ覺_レ○_レ起_レ居此十品ハ能_レ心_レ字_レノ_レ凡_レ例_レニ_レテ

○_レ耳_レ口_レ○_レ手_レ足此六品ハ支_レ射_レノ_レ射_レナ_レレト_レ平_レ話_レノ_レ用_レ多_レケレハ折_レヲ_レ替_レテ_レ四_レ斗_レ有_レレ

世等ニ連能ノ用上ハ世四子モ例ノ都鳥朝無用トヲ知一レ都鳥朝難向ナリ總テ
 御筆ニハ新式ヲ災言タリ毀タリ早竟ハ自己ノ傳授ヲ曠
 此古凡ノ抄者ノ筆法ナリ世故ニ今ノ他譜ニハ人ヲ毀ルニキナ
 置サレ例ノ虚実ヲ察ススキナリ○稿負鳥○百千鳥○嘔子鳥
 世ニ鳥ハ歌道ノ傳授復ニテ他譜ノ式同ニハ不用ナレト
 涉筆ノ文法ニニ鳥ヲ粉成レテ或ハ律メ或ハ後メ自己ノ
 知識ヲ飾ントスル自讚ノ古凡ヲ笑ルナリ然レニ段ノ詮用
 ハ文字言語ノ用ニ非ス混尚ニ中古ノ誹諧ニ敵レテ
 此十條ノ意地ヲ立ルニ言ハカ當ノ秘訓ト云ハ一ノ刀
 兩断ノ法語ト云ル文ノ虚実ヲ看破スレ

古今抄序目終

拾遺十箇條

月之四

一理万通序

東花坊

今ノ抄拾遺十箇條々負字の末比よりえ縁
 の及美商ナクに湖南ノ字々ふられ武以に陰ハ
 了故翁の夜話と紳とさるりてかく十條の
 極目と忍と一に故翁と世よりゆりてねと孫と
 狐子庵の遺稿とそとや五秘の二帖とんや
 きる也とそといふむとあれハ世仙の世と言おし
 負字の御筆もさる金了應安の新式より

器賤食服も目もきら耳もひく物と云情
しきを云ある一々れいきとひ人の制と云
我と用控を云ある一々也指令と云語法の振子
あれい子余波のつとありてありん能階
てし我と云ある一々い連音と能階い何す
の式よりりせし何すのはうおろをうありん能階
と能階の遠近自と云也我と云中古の能階より
各教の増減よりりす和訓の何と云と杜能
とつひ音語の牡丹と▲ぬと云竹と云おと云連音
い和訓の一あれと云能階と音訓の二と云るはるを

和漢のきとひあう音訓と云一各せおあり一能の
百約よある一物名の二も云ん今此能階の世はより
論をい字又の端此不様轉と云一はと云今此
能階より古はの名目と云む一と云きとひ牡丹の
を物も或を踏波のわんとい或をわく餅と云
時を折と云り而と云りて又白しと云るしと云れ
と踏波の牡丹と云るくと後此能の力ぬりと云い
餅の牡丹と云るくとおと云熱の膝と云と云能階
い例の治ちよりかりて物物の牡丹と云と云と
云と云と云と云と云今この差子と云るんも云

▲杜若▲芭蕉あし古はよけれとあつて或る音訓
の二とあり或る裁入のこととあされと二つあるは
各目をお目いね不用とありかたれつ▲鶴牛と
いひ▲鶴牛といふれと音訓うしに只一とあま
るへ程選するに和音連歌も裁入といふ
し句と作るはあれども家もはらへん連音も
いもちひと二の能滑るも取とあまはをいひ
とちりつと様もあつて連音は地味に
し似るん流笑を録る家のはあつて新條の
と才一の誠也返くも今此能滑るも字をいひ

はのかよ同さふ名の象ある物と^{カタキ}とあつて
そのい様とよふとつと見同し姿のかり
一たつと一と一と見ずし姿のかり
ととつと字とどうあつて例のつと
各目の教量と一たつて様変うて古はの
いそ謂ふれい百洲千名もこたに

○去嫌可有^{ニキ}野敵事

むし此能滑も今此能滑も野敵の論のめあつて
次す括の二れとつとるなせれつ申も人傷の

へきしひるぬゆり凡吹といふもいふるのうすも
 けり百病を百病あつて人倫あつてしつて朝
 けり人倫とて百病とてさつて起る見守の詞
 とはけて人の心留をたのむべき言あれは父母とい
 へ男女といひ目もとら耳もとらるる文字の心か或を
 自他のおもひよもつら或は汝情のきこひを考へ
 打越の附心といふあつて人倫の心をもぬかよとも
 一むの心もつらき言一むもつらき言一むおはせむる
 △こゝ△誰△身△独△媒といふおとをき人倫の心
 して人倫とて定つていふてこれいふは割の實を極と

おもと一むおはせむる言の覚かといふおは△誰何とい
 打越一人倫と婦よとて例のよふ子とてよあ△僧ハ
 人倫よあつてとて例のよふ理居とて一色くうを
 けをよむ百病とて百病とて分ふとて一むや△僧の打越
 一人倫い去へ△寺の打越一人倫い婦一むとて
 △親王△皇女のつとも△天皇とていひ△王女とい
 ても何の部よ入てはとて一むや△帝も人倫よる
 去へ△佛の心居よとて一むはとて一むはと△仙洞
 △新院のれと人倫とて居よとておよとて一むは
 けり此式も部れと定つてわつて△佛と△鬼北

教とほくさねとまゝといふの各とあけて一象と
 百物とまゝとち二言とめて万語とほくさねと余とけ
 例におおとまゝもいふや古式の婦におの△おふふれれ
 大論より△月と文料と附るとまゝといふ△昔の世
 と附るとまゝといふとけ論を今の用とて何と
 △錦とまゝといふ詞と全く連字此用して我家
 いけ詞とまゝいふとけと誹諧の教文と△女の戯カキおと
 まゝい△大工の規矩と婦スミカキふれれ△何れとら論と
 及字と或と△匠木と事とまゝい△款ナレキと木の何れに
 連字此用ありや△正い△向い△誹諧の度コトナシヤク不見

あん或と△篠と依と罷とと婦ふ何れ何れと
 一かれと△羽衣の扇の書と水也とまゝい何れと
 と折号とまゝい況や△山依と巨宗と婦ふ
 いととほくさねとまゝい百世の人とあやとまゝ
 いと一或と△詞伽とお分とまゝい△送とお
 とあ△火とお分とまゝい△時霖の句論と
 △起りし△海とまゝいお分と婦ふこれとまゝ
 論と論とまゝい拾の理と婦とまゝい△忠△節
 のおと大むとまゝいお分とまゝい△家とお分
 論と論とまゝい打越のまゝい△とほくさねとけ
 一お分

の指合とて言ふことけ例と勘ぶの境極とらふ
 角一とや古式の嫌ふぬ物と△冠とあること
 はけ△綿と本棉とはけ△又さしとて嫌ふぬ
 の△ぬと言ふこと△言に持てし論されたり
 ことあることけおとさるる一階と嫌ふこと
 今の能階と全く可用の何はあれとてま
 け及ぶとも可用の凡例とあることと余は
 皆く尋るに及びてはれと大い一の何はと
 △生とらひ△所走とておれと異名の何と
 附一打鉄と嫌ふこと古今の指と稱を一

他を証しよきと月と附きとやぬさぬ知る
 古今の軒敵とて連音と二とある物と能階と
 一と二と連音と一と一と制と物と能階と
 と二ととらふと能階とさし且用の能と一と
 の人知とあつと折ぬ一馬の打鉄とぬとさ
 半ありとてその時をとやとてあると一と能は
 連能の用とて可用とさし彼とて家とて用あれ
 こととけおとさるる用ありてはとて通自在とん
 とやあるよ字とらふこととて△山然と家
 とさし△所走と軒敵と嫌ふこととて一階の年

又千字と部して百代のいおとほしむとされ
 二世の象譯をかくのこく二世の象譯と象譯
 へく百世の象譯とわらふも早言はる合し
 去嫌し今の能讀と論する時をよめはねの味し
 辨あるも言は部よと界とをよゆりし能くたの辨の
 とかたねくふちしも本波のあふんり男也とさる
 一能讀をよしとるす時の二世の作はし
 ちよきまを

○指合可有分別事

海軍より一能くし可言おと難とくわし中し

可言おと^{トテ}の^{トテ}逆の^{トテ}てと指合なりと^{トテ}なりされ海軍
 一〇^{トテ}而の^{トテ}二^{トテ}字とあげててめつたし指合ありと
 されしとらしし例のなとあるとさし偏へ不味
 としよ^{トテ}し^{トテ}爰し和漢の訓美と論する^{トテ}逆の^{トテ}字
 一^{トテ}字^{トテ}二^{トテ}言^{トテ}あれし^{トテ}字^{トテ}中^{トテ}の^{トテ}詞^{トテ}し^{トテ}て^{トテ}の^{トテ}字^{トテ}に
 指合なり^{トテ}而^{トテ}を^{トテ}為^{トテ}而^{トテ}の^{トテ}訓^{トテ}界^{トテ}あれし^{トテ}字^{トテ}二^{トテ}言^{トテ}
 一^{トテ}指^{トテ}合^{トテ}あり^{トテ}ん^{トテ}今^{トテ}中^{トテ}し^{トテ}可^{トテ}言^{トテ}の^{トテ}逆^{トテ}の^{トテ}と^{トテ}ある
 花とらんそ^{トテ}北^{トテ}中^{トテ}の^{トテ}字^{トテ}と^{トテ}語^{トテ}を^{トテ}花^{トテ}と^{トテ}る^{トテ}む^{トテ}と^{トテ}ふ
 下^{トテ}北^{トテ}界^{トテ}あり^{トテ}し^{トテ}與^{トテ}而^{トテ}の^{トテ}二^{トテ}字^{トテ}と^{トテ}し^{トテ}ふ^{トテ}一^{トテ}字^{トテ}む^{トテ}なり
 而^{トテ}字^{トテ}して^{トテ}の^{トテ}訓^{トテ}あり^{トテ}し^{トテ}厚^{トテ}斯^{トテ}而^{トテ}の^{トテ}界^{トテ}あれし^{トテ}物^{トテ}

了大和の詞とる者テヒクのとき、訓畧をおぼしきとい
 歌人も連音解し假名と真名とに通せられた
 不素のころのおぼしんけ詞をおれりおぼしと
 ちりい中この時く申しき用おれり傳命とほ
 てかくのころ一指合のされし轉々れり是の二
 の字近ははるせておぼしきといふは、
 所合の作者の字書とあはれせきとを建ナシと
 お用して寛制の自在といふは、やの社為
 らたしやうておぼしきと上下のちりりてきと二句
 と定しれり何なるやと分るは、一〇比るり

ころおぼしき連音と折は、一は、流式と面とを
 辨しあれとれくと耳も字も詞もれ能信
 の二流と折を命して上下のちりりてきと二
 は、まじや或と下せりめ。かありて、あるし
 千句といふと、おぼしき何のちりりやいふ
 の、余遠波ともあると、ぬの音、書、あはれと
 公衆とおとよ人のおぼしき、一は、おぼしき
 ると、いふおぼしき、和歌連音とをせし
 と人の詞は、いふたし能信を信流、事、話と
 ぶおぼしき、おぼしき、いふ、おぼしき、いふ、おぼしき

とをとり花みよの二つと。〇様と花の面をとり
て軽く。〇楓とみよを折と矯ひてさう何と
二つの差ふあるやむと。〇其の豎とつみみよ
いと秋の色とつみて楓と楓とを折やむと
みよをとて用やげぬとむと楓とあつと楓
ふあつとらふもあつとを我らの面を論ら
とやむと論と楓と楓とをみよとて面
らりて只一あるとまよや其折と例此教を
さつとあつとられと楓の二つとてさうと
後の二つとて論とらる。——今選とらるにた

の二條と指合を何のあつとや去様と何のあ
や一とたつたの。〇あつととさうと例の式と
さく例のあつと合ふと。——つとめとさく
めとさくとさくとあつとの按記ある也

〇千句^二有^一一物^二之^一事

おも連派の古式より。〇鬼・虎・龍・女とよれ
八千句とよれとあつとあつとあつとあつと
のさつとあつとあつとあつとあつとあつと
へ能治の家此常説とてさつとあつとあつと

つとむりくおくの詞あるに連音の艶美うと
はいあん飛音の何のああるや女と男の對
ふ女と男の二句して男と百篇とあれた
おとせ丸のちういあん皆まて人の私うて
人より人とまてうとつる事物のうとまはける
あり況やは筆の款文と思を^{ケヤレキ}を物ありあ
女と俗とやゆりあし和歌連音のいひあれ
と飛音をうらあゆりうらわさしやうと
とりのしを物とむねとまらうと新と我は此
暖熾といひまう船は馬士の鄙談よあしや

暮名るとハやばおもりとふと今この飛音
うと男女のうとまじし音訓のうらうとあ
うと新と例のあといひまてうのまをけ例と
あると今選まると連音の用と申ふとの今
とあむとまの艶詞と凡格とはげて殿上の遊
の優美とあつり今此飛音の用と申ふと
此音ととつて^{モウレホ}情詞のあし凡格とはをて
と諷刺の和とまてむと連音も飛音も
新言のあつりといひ俗語のあつりといひ
言語の病あれといひの連音もを物と好む

づれの能潜り郡詞とありてむ能潜のたて集
 の傳受りてとる會し海や公能信の
 和漢通達の音能達も能潜の所也あり
 いこれくのそいさうくふやとある一はるよと
 我十條の返をさくもおさるさまかく建門
 のさ地よほのれい和歌とらひ連言とありて
 能潜とありとらひいひされしに不孤起と
 大道の道よりそはの故さときめれそ武の
 新さときんしよまれいそと是とらひされと
 非とらひしよまふくふの人の彼より我

とありてむくも我ら彼ともくよ我あり等
 多し春秋の釘語とおのい我とらひめしけ
 十條より我と罪とらひめしけ十條ありん
 初よりあくら神の造よてこれぬあのみ前
 け言とらひて一きん再選の功とらひん
 一世の議とらひて今れ十條より一我の海と
 へまうとけ一はあり

○花鳥有_二物_一之_一事

旧式と竹本も祭のれいおむね只一とて音訓

と二花は二あり一とぞう古今此意とありし
てさ色もしてお梅とひ緋桃とひ梅様のおま
とふとも決りて二をあらうもと余の竹本も
け例はあつる可也中よりけ式の流るるお梅を
はよれともちる日とわかぬ二様とおく流るれ
かつる時とらるるお況や掌の盛衰より厚も
無もゆるる世とまもも口本子のうらりおねおへ
凡雅を例のさひこより悲喜哀楽の更とされ
と色まうへるも各とともして一花二用たる見
あれ二花は二とともうよ一と一原二百二この例と

ある一花は二季の例は及るぬ山嶺とら郭と
さふれを決りてけ論の終れあうにけりあう
二用の例ともて花咲といひ実をうといひ生を
といひおわるといひて百も百と二用とあふ
四季の各目をかきりあうむけけ式のあし
つらと例は凡雅の貴賤より花名の三ふとけ
月雪此お景と一花あたるせとれと十知の
例とつふ一はとてと花名の二名もんらまもよ
つらりおまもよとらるおあれとも各ともをしに
用とつおと二もよ二用の花もと知一とてよ

論といはし一様を令く新制表此例はよ似たりと記
と破れともいはれと破くなら右今の制語と之
つせさなりけ例のむさるるとえりて二方の実様
いふよ及びて一世の實様を記しよく百世此
の實様と記しよきやあつていふかむさるるとえりて
右今の制語とある也

○日用可^キ輕^ニ物^ク事

右おろく○音○曉のおろく○二庭○垣○袖○襟の
いふまへ○湯の○けの○いふ字をとおもて二三

あれとも音を右今の字例よきとていふ曉を
暮の字例よあらふ一一例よよとされいふ通の時
ふくむいふやいふ事よの文も○はも訓義とて此
おむつうけけれときく折と念とていふ勢と
いふある一一むうと連ねの或月と態^{ワカ}とよ
言とていふあはれと○はとていふ○第とていふ○照とて
○植前とていふ○音^ハ外と○起^ハ指と多用ある
中も○同^ハ鼻○耳○口のこもいふて○いふの字も
○足の字もいふておく此等語あれは其神の例の
あるよ及びていふまへとていふとていふとていふ

おろそ態茲の字あり一塵押借用の軽と詞
 いさしといふ式一にさしあし折を替てと詞
 さむくさかの詞の面と折てハとさむく
 七句といふさむくさかの面と論及
 ずして折と折とさむくさかの面と
 一もさむくさかの面と折てハとさむく
 わりてさむくさかの詞の軽とさむく
 一はれいさむくさかの折と折てハとさむく
 とさむくさかの面と折てハとさむく
 の字類と凡例とありて必と一固とさむく

と折とさむくさかの面と折てハとさむく

○ 不可不富控之事

おろそ中右の式目と論さるる一は連詠の
 用する用とさむくさかの面と折てハとさむく
 あととさむくさかの面と折てハとさむく
 滑稽と諷刺の和とさむくさかの面と折てハとさむく
 詠とさむくさかの面と折てハとさむく
 不富とさむくさかの面と折てハとさむく
 一はれいさむくさかの面と折てハとさむく

あんまの字をまきぬて秋北の字をあつて根が
 ておまの辨ちるをやまるとつて根の下と入れ
 へる根をまありとつてま根もおありとつる
 まふまの字めちつてありとつてま根と不富の
 不富の字は但々とおと着神して不持不助の記
 とやいつて或と標とと雜とつれと標とつる
 分論とつてま根とつてま根とつてま根とつる
 名あんと論あふ秋字とつてま根とつてま根と
 記のま論とつてま根とつてま根とつてま根と
 同つて奥候とつてま根とつてま根とつてま根と

と新破して記のま根とつてま根とつてま根と
 まの記の記の折と標とつてま根とつてま根と
 連字よりつてま根とつてま根とつてま根と
 平話とつてま根とつてま根とつてま根と
 此論とつてま根とつてま根とつてま根と
 不富の候とつてま根とつてま根とつてま根と
 但々まの連字とつてま根とつてま根とつてま根と
 古抄の候とつてま根とつてま根とつてま根と
 家議とつてま根とつてま根とつてま根と
 まの儒佛神の家より今のま根の候とつてま根と

へりて猶のね子のしひに於てそれと能信と
 各にけなうけしと連音のふ式なうしと
 あつまの人の京詞はとへ馬は嵐とくも
 うとく今の能信の言行も可用のほたの
 お月さんおれの中よりと例といふ
 附句と繋ぎととておとあけ万葉とい
 れこれと今を附くも所なとこれの論
 こも及ぬせ或と榎を新あり世をむこ
 へんさあありきとひ花のなはくも花の
 あく白所ありはまよあるとと何なる

け榎のこかく念の入るや或と蓮の突いさ
 蓮と花とともふと指おおと蓮肉
 あつて茶杯はくふる所ありはれ也は
 榎おとりもなると新也とつてを傳
 の海秋の念の入るや藤人とはとふこ
 能信もつりて言ありはるはあも榎も
 を張るぬを新ありはるは花と共ふと
 へ千叶も一本もとて也或と榎本の
 松と心と例のこはの類説は新なり
 のを新附と今世能信もはる或は皇

のちありて花の字はさしむるに辨ありしにせしあり
 来たりとてそのおと今への例しうぬはたあれい
 例のりくくもあれとも今此式目の可成あれい
 せまこれいけ論の二條とア信字のほとて子へこれ
 とむし此能讀と今此能讀とおありするもさへ
 あく二つだけの中すといとけ二條より老んと
 のしや

○文字を穿鑿しむ事

予より能俗の席より色くの名目ありて文字
 穿鑿の事あれと目の。これららう花の。これ
 たり

くせむるにまげの同よふ及るをば一て。せありう
 ○成ありうをせむるくよのあれと未練の能事
 とて又配する時に指ともてきてよかんより各同
 いふてはさうしきんこれと能事のきく。あむ
 べきもせまこれとも。場あり。庭よ此は法と
 出金よりち駿うてふ用のは法あれと我々の
 大和詞より真名をきく一字一用と定て中文
 一字も中とされぬと西字ととりながら庭場の
 差ふらぬあれとて子一用の和訓も紛れを
 我々の書けよの庭字とみいと訓とてく場字の

むと訓と一しきしひ字文の識伴達とて叱つ
まうらもむりや動りともさしこち美ありとて
我鳥の馬もてかこもあやまりは教ふあきせ
物して今のはさくあらち和の事論は凡雅を介
て諺笑の和もあさつむとさるる爾雅は爾海の
正詁もく及ぶとんけあよけ後と書る海鳥城も
陣ともりて馬もく後ひとさして甚く衣とて志せ
より古抄と新し古老も敵して平竟は今此能諸
し耳字文の害らんとさるれせはらや伝令事れ
鳩の下よ。鳩をたひたあつせあひの海とて字し

ふやせりしりり一あきさしりいつふあひの海い
ふ字をあ一人とまてつとてしをけあせあひは
ゆりつるの海と大はれとて一あさつとて何とて
のあさふ池水のそくく湖水の志ぬらしを形容
ありと山崎を伝のドとれしはらあひゆきま
各疑りしや或ら。○海字のた牙聲をよ海の字に
り字の誤あり曝布のうととち一ととて例の
し子彌もあり但や曝字と老人の誤も曝を
飛泉懸水とありけり子と曝布と訓一
流と流く人の形容より海のしりしと美訓

あしん大和いけれとよのむ時と一ましく片假名
 と付しまやうまうまの誦とあしんまうまの幸一牧
 と埒のめりま馬と馬と訓らるるも今日の用
 と達をくまも儒の如く書教の字向とらうま
 能謂を人和のあしんまや或る。詠の字は
 和文よりのまうまの同訓異の字は後
 るたれん式月例のまうまありまうまの和字
 連字といけまの訓も分るまや詠とらうまは
 以前とく^{ナカニ}承言といふ字訓やまうまの詠の字も
 古今の字もして咏嘆といふ時と詞と亦く感の

しとまおとあしんあやあり佛家のれ誦
 節とほくりしこれの咏吟とある(まうま)もまうまに
 同訓異字といふを月とあしんまうまの詠字と用ひ
 といふまうまの詠字と用ひ(あしん)詠文と
 流視の字訓ありて本家の右訓と^{ナカニ}物と^{ナカニ}監
 う詩と^{ナカニ}睨字と^{ナカニ}訓と^{ナカニ}也まうまの物花といひ
 詠花といふ西並あれハ^{ナカニ}の副假名といふま
 んし^{ナカニ}詠文の美といふを詠るを^{ナカニ}承為の略
 りて^{ナカニ}流視の略ありて右よるまうまの美
 ありて^{ナカニ}詠文の美といふを詠るを^{ナカニ}承為の略

し假名と真名とに通をいれぬ家通の字
 ちりいより箸橋といひる給とつり同訓の
 穿聲をきふへくもはて年論のその中より
 ○數とつふ字此穿聲をなれ年一部の長文と
 建治應安の両式とをく日名園の字近達と
 著く落とつふ又辨くけく微細の難向
 へまも微細の難答と一字論を例の可く用
 あり筆^{スナミ}にを又の優游とるふへく^{年日}齡
 のとをらにをちるよ年の子但教の七十八十を
 不可^{スト}嫌くこれ新式のお越と嫌ふおのあふ

ありそれ新式を惜学此名近達のおほくを合
 へ年ひくく穿聲をなれ今を力ともめて
 けおあし骨おをもあしと持ありと一
 し感潘とありけりされけ一ヶ條を龍の
 ばまはてとやむ又らるる及とるよや
 文よ合且とくくこをら回とらとふよ年字
 と二白きといひこをよとつめ付を不可^{スト}嫌くと
 ころちの字よ年の又なあるといろくぬれ
 年終歳末とこれのせよしちのあり
 おろくを古人の誤るべしと今を新式

又その字のよきものきりて今も各々けしめ用を
 新式の字の字と持ては筆の字の字と用は
 ありされし新式の字の字と持て今も各々
 とせむしその筆の字の字の字の字の字の字
 てよきもの指令も中念あるを能くし能くし
 へ類類といひて世用の後語よりあるをせしめ
 以下を丸くして例は凡の字下自慢也今選
 ました難各の字竟をこそあらと二十年此訓
 罷りて禪師といひは師とて小撥字とて字の
 をおめし障子といひ葉子といひ和訓を

これの俗ありて多と大和の非秘といひ
 きたる者おの神の字ありしは漢字の自慢
 係語とせむし一いつまこれけ論の字も
 法筆の字の字の字の字の字の字の字の字
 あれい語の二十年二十年二十年二十年
 あり物の表れ七十八けの字の字の字の字
 と新式の訂章とせむし一いつまこれけ
 こときを例におめし記ありしは能くし能く
 けんとおめしはつと能くし能くし能くし
 能くし能くし能くし能くし能くし能くし

詠美し比喩きし詠美の遊しして世はよ人の用あれしとみよし世の能清をきるる

○家々秘傳の事

むしりし和歌し連歌し家々の秘傳あり
折言辨血刺の所法よおよし中比の能清よおあり
和歌し連歌よほしよし波と秘をよし
今此能清しつりてしを危し入るしきりし事詠
ともしよし候よしよし人の守れぬ能清よあり
とよきよしあやし各目と二言よきりし

実ぬをぬせしや法筆の不埒と誦しよきされ
秋されの秋よしよしと付の詞しよきあり
きしよきあれし秋あれしよし歌をよし連
しよしとれしやあふ歌者の後しよし
よき実の美しよしとぬせしとつりしよし
よきよしの流しよしと誦とよしとけし信しよし
よしよしよしよし秋あれしよし実よしよし
よしよしよしよしよし秋されし連言し
用あれしよしよしよしよしよしよしよし
しよしよしよし能清の日用しよしよし

此年のおそろふと申はけり朝あけの程を新式
 一非お分^ニお載せられり既にあの子あり何
 何の程ありて二条殿の古老をありてやを
 お月つゝあしあけを聞かましくいこつホれ又
 お通ありとて今よりお式のまゝに申す此
 凡例よりあつらひおとつる時分しておとつる
 つゝお分あるとてあつれせくの連身程の程
 多うと時分といひおとつるとお分よりあ
 一あつらひとて新式を百世の或つておとつ
 一おとつれともあつらひを非お分とて不

何とときとていひまゝに詞とあらして老老を
 こそ世より二条家の御もたかきとあね不
 放言して新式一部を老老の御ありや
 一あつらひとて我より十條の御ありて人の非と
 あられいふとて是非とてあつらひとて四の
 とおとつる一とてあつらひとていひとて
 一とて天下の御ありて他後ありていひと
 一とて各月とてあつらひとて稲葉の下といひ
 一とていひとてあつらひとて稲葉の内の
 の名は正なりと稲葉の御ありてあつらひと

古今抄巻四

三十九

うて内秘が現とをけ謂ふれはるるは佛家
 へる秘家不定の二教あれと秘家とをいふは
 是といふもるわの注とありけぬは秘家の二枝の
 花とをいふげの二樹葉と歡ニツコ爾とありぬ孔子は
 一貫之也道も常々と唯アル乃と口とひくもる
 の忠恕の言とを道ニケ辭とて破ると耳と
 もねの何れありしうもや申古のお者達の
 泄泄の式目とえぬとて歌るの秘事をと
 あらわれや秘授と家くの符帳とてんて
 是とてあらわれ我が家の泄泄とて古とめたり

今とてはしむとて二刀兩断のけし語とては
 一部の秘訣とありはばりし軍部の邪とて
 是れをいふも説破もるは日なるとは
 るは秘するとうふもるは及りて言はれ
 然識の通の場とてりて秘傳くとてりし
 一とてれとてけし條を佛秘とてあはし
 あはし我家の中ふよは東湖南のり人對と
 りねの事論とありて新故のきくひとあり
 ありてありて申古は泄泄の右とてりて古
 語とて古とて新とていふとて人よとて

是等の口とけをもつておぼめす前よりわが世に
 まうとあはれ我の家も能潜も古人ありとる
 千系一斬の秘訓ありて百世も天下の古流と
 坐断され今此十條を考に却のつていひて
 論するも故託の耳とるるに似るにほまた知
 天道の恢ヲキニをいひ能潜のるをいひ儒門のま子
 此詞よりを起身して六藝の媒とをさるる儒の家
 史記の沖とあるをやまはれ能潜と能潜と
 い各ふの家あはれ此の武目といふ事すとい
 あつたし自享世とつりえ禄のちもまてい

京家を此の能潜の名とほくく之世又世の門と
 加ふてし書けおよ武目とさるるに今此武洛の
 宗匠家やうににおよそ二十余おもあつた
 ともく長政老人の法年ともく能潜とをい
 ひ能潜も能潜もおよ一ゆはとあるとさるるに
 我門の古老ともく宗持のちうひ此通をいひ
 およしともくおの遺誠はうらりと十余年
 とるさるる能潜の辭をいひてかくてい
 とい詞とさるる古凡の附方とほく
 とおの例の二さうはくおをいひたれの遺誠

能諧古と抄美之下

再校東文と式序

蓮二序

じうしりるの建きとらふと仰所のせし余美
 虚立くとも志やふう初善と橋陳如の
 實一はかり儒書の四百余年章七実子く
 ことと一へあう懲悪と縹悲子の虚世とい
 神懲らう一も時の要とせとて虚も虚
 実も実あしむとと要通内とらふ子
 ありしは能諧のる方や和号連二序の流

方々抄卷五

と汲ふくも法をおもひて可くもいふは
罪をもてはをわくもて可くも母の横暴と
まういへて二たの増とまうくも傳傳のるよ
いぢり人の連能の家より近よりはより
一塵実より自在なれはれと二所の説と
けぬよ今廿二冊とより享武の附録とあり
の生前よりありの五つありの説とあり
いゆり万の浦の例とありを律より
あり一て百世のありありの常用
の要よりありありありありの説より

あり一多として同録より古法より祖の遺訓
あるはより○け白圍とあり下より今式より
の新制あるはより△け白角とあり下より
二様より取捨よりありありありありあり
の設より子よりきより子よ人の罪向と
舞より不道の罪とありありありありあり
ありては清より道より一よりありありあり
ありて天下よりありありありありありあり
西成敗とする刑罰の法とありありありあり
孝とあり刑とあり古法の各同一実とあり

を窺ひ遠く百世の明證にあらせよと我は漢に
おろれてはとまじく漢にけりまゝとおぼれ
ゆらんやいづこに深巴南の秋八月十六日付
序文とまじりて文早観の塔前と教
て甚重誦再おぼらむとぞ

東花式目錄

大段十二首條
小段五十五條

一花ノ様也事

- 幸崎のむし山標のり
- 花ノ様人のり
- 瓢箪ノ鉢の標のり
- 様葉集ノ系標のり
- △ 富士此野ノ標のり
- △ 標ノむし標のり
- △ 岩根の花ノ標のり
- △ 二句一意的花也
- △ 春秋の花ノ差子のり

一月に只と早也事

古今抄卷三

四

○宵園ノ月と云フ
 ○夏名月ノ
 ○夏月おれ設の事
 △夏ノ月百の事
 一 ぬれ月也事

△朝向より月と云ふ事
 △月よりお向の事

一 月也一字ノ誤也の事

△月と云ふ字と云ふ事

△月と云ふ字と云ふ事

一 儀式の席ノ奉向也事

△一字の誤も名もの事
 △面白類白の事

○屏風のたし菓子盆の事

一 當季ノ物名也事

△玉也美言の事
 △梅中指の事

△松虫ノ句法ある事

一 五ノ字を詔也事

○夏ノ字也附合の事

△在所の字をくれ事

一 懸向ノ句作也事

○幸崎の松ノ様ノ事

△美入ノ曲節地の事

一 附合し七名八躰此事

有心 會釈 道句 起情

○ 向附 柏子 色立

右七名八案方ニシテ對附ハ負外ス

△ 其人 其場 時分 時節

時宜 天相 觀相 面影

右八躰ハ附方ニシテ空接ハ負外ス

一 懷中ノ名目此事

○ 百韻 七十二候 源氏 五十韻

○ 四十四 二奇仙 首尾吟

一 求韻ノ向教此事

○ 源氏行 ○ 二奇仙行

△ 長歌行 △ 短歌行

一 同季ハ之句云々ヤ此事

○ 二奇仙の遺訓ニ花二月の例ある事

○ 各張の裏ニ春秋二句の例ある事

古と抄序同終

新制東文卷式

皇く五

万法一例序

東文坊

是らく古今の法式と云ふは御孫と孫通別圖の
 法あれは儒書と礼楽書教の式ありてかこころを
 又百の戒律と云ふはこころを威儀と云ふ
 と云ふことと云ふは多ふ人の修けの得るよ
 可也かく實の功と云ふは心と云ふ時と云ふ
 時と云ふは縦横自在と云ふは心と云ふ離れ
 ことと云ふはことと云ふ人の變通と云ふことと云ふ

ありて云ふれは老花揚るるもは音連能
 と云ふは人にも心も書も宜しあふも族も心時と
 云ふは心も心も時と云ふは心も心も心も
 名人の心も心も心も心も心も心も心も心も
 いたる家れ心のるも心も心も心も心も心も
 名と云ふは心も心も心も心も心も心も心も
 の名も心も心も心も心も心も心も心も心も
 七言の法下は心も心も心も心も心も心も心も
 心も心も心も心も心も心も心も心も心も心も
 心も心も心も心も心も心も心も心も心も心も
 心も心も心も心も心も心も心も心も心も心も

いけ能潜といらるる神神の和光とかくまじき
まうれといへるまはとらるる式ときまじき
の可し言ふ能觸して良佳の御命といらるる
しうられし連音此の家まあしうの良安の新式
と鑿形とあきらより例し能信のちらるる
て一歩子にせまらひまあねりゆして能
能潜の又十余年の新制まうして能潜の能
といえふあられいこたはよし向の能たると
指合を嫌のばとまらより古式の論まらるる
あまらりてはれと二の設まらるる

能のりらるるいこたはよし向の能たると
記向の能子よし向の能たると
いて後し暗記まらるる能たると
え祿の中比より能永の能たると
と能いありまらるる能の能たると
おし又まらるる能の能たると
一あしちし一能たると例の能たると
とまらるる能の能たると
良章式の所録まらるる能の能たると
能音連能の中まらるる能の能たると

我輩の歌よおと誹諧ハ言偏りて傳よけり
俳諧ハ人偏りて漢ハ漢よかれハ此亦ハ今此
不製あるとて漢者其の不用ハ明ある人々
月に雪にむらさきの日くよあつた月く
あつたそと世もを世設あんなれを
我々の懐りて敷時のはれをく同所
不用の用とあれと世時寶永に因りて
十月十二日ぬるの靈前ハ世福とさけて燃灯
折巻の信とはくして百世の真傳とまゝに記
まゝのものや

新製衣東文七式

○花ノ様此事

花もくは新よ月ものりやとて春の秋の
糸物といひもて度もを此飾をあれ世に此
五節よあそびて四例の舞美と測り
てくもるよ新音を求へてとてとて
白雉の遺訓ありやあつたに連流の古は
らん花ノ様と所らるるを様子と様顔とも
日々名るよ夫辨の物とりてとと様の差ふ

とあるれととのくこも縁と原とあるのこも
いふふと自然なる者なれせけぬ一冊と
ぬるよとや所の決句とあけ次よ我堂の
鴉鳴とあゆみて百世の設は使あんとて
例の案議し用捨とて

○ 幸壽の松とむより勝とて

山と橋と志はる 幸壽

けき白く湖南のまをりて今とてい句とて
言ふらよ及字と志るにけ服の山橋とて時の
実源もも崎と松とむとつひらとて雨の橋と

つる花と橋の不様と志れと我他いむけ橋
いむくも心寺の山橋とてる下

○ 詠とて花と志るくそめ貴

かきけてぬ。 山橋人

けさるく檀林の能活せあると中右此決句
よ此の能抄よ志るく例の古凡のい
ふれは今此能活の漏るなると但し橋くと
借集糸の名目ありて主人と花よ志るとれと
むと橋れらぬとあつらひて花よ橋のい
不祥の秘訣といふも也

多角

○ 本のりしとけし物も様うか

花序

○ 千部らむむの盡北一乃田

之則句

○ 志は初く水は菖の枝うら

花序

○ 系梅版一とひよ嘆よきり

けは句となおの遺訓せふの稿と齋イサヒ集未た多句
うく初折の花序よふ花あり後の稿は猿蓑
集の附人多うして初折うらふ花ありて今北
系稿と名残の曲節である日本を留る北四州
よりうく系詠は二集の撰おときうれいなる
例の若ひくすもや我家のふ花論は花と

様よあきも様よあきとらうも何とてとを言説不到

の所授うしてはとてつふを秘訣よ何れ二之

子あはれおよをけらるやゆまたある一我家は北

能活集と天和の比は世觸とら冬のおまは

ら論し及びも姿情とおよ我類集はらうれ

て花実とほかに猿蓑集よとてあふらるを

け比の炭俵集と変化の中北曲節うして能活

はかくと変とある一とあるれ猿蓑の大任を

系稿の巻と一部の巻を軸といひて集は撰者

の向ふらうら言に名残の曲節とあり一部の

虚実とあるはさしや糸襦と例の秘訣
了まらぬと文章此優游ありと我し

各句

此花の芳名を名に牡丹は

△花

我國のたよりを嘆きまじり

けふの向は牡丹のあふりうの定あき岩に牡丹
と名をける掛物の金替せさらりと朝妻の賢
とあつてまじり此能滞の奥にまじり此新の
花をいりてまじり山様のら子と用中を設
けむとあれは和漢の花名のあきまじりて古知
のまじりて様とよき諸越のたより牡丹と名をれ

いそふもははし此言即ちと様にあつて牡丹哉と
岩に子よはまじりてまじりて今と花名の事
ありやまじりて花のまじりて我國のたよと
称をらんやこれと凡雅のまじりてまじり
ハ牡丹といは様といは心詞の花とまじりて
諸越といは牡丹とまじりてまじりて百花のまじり
と嘆きまじりてまじりて我しとまじり

各句

此花の芳名を名に牡丹は

△花

我國のたよと名を

まじりて山の花と名を

古今抄卷五

世

又別の句もいふもさかきもるやまゝるにそまの
花はたよつて例の象評と寂子と様も花を
論ふれとまに事とつ詞をたよあつて様よ
いふ一まうの象句と花とゆくとまにけ時と
ま様の評もとまといまうの象評の
一味をり但つらむ尾上の二子に仲の二子のまを
摘りてれつと連音此能活とつ一

△^{各句} 雑子つてまをねとまきとまよぬ

け象句と山中、事ありはつとまの花に屋と
つりつ例の象評と寂子とまをねとまよ花

つて決つて本風はつとつたれと例の名とらな
をあれいまも様やまうとつあぬと様の一字
ともら中但つて様電のとき様の名とらつ時
と何とあつて句をまの象のまよるつ

△^{前句} 象の陽をいふとまをてつ
△^{附句} 肩衣をまといつ世と捨つ

け附合と越の新深とつ鑑章のまよと
ま仙やられいま仙のまよと二折の花もまよ
と附句も同作の句をあれい各々のまよのまよ
時又例と花をまかんとつまにまよあつて地ぬま

しくあつて同作のむとらむむまのたふりそれを
 向ふよそへタカカ邂逅しけ席とゆりけり世繼平
 の仲とてあむとまへふやうの幸とわくおあ
 くまふと此ふ句ととりおあしく秋の花あんな
 今世よりゆり夢通あもあやう白たのぬあられ
 ころそ花の同作よかあつて同作のふれあつて
 もふれあつてふかしくあつてはしあふまのあは
 ころひはとあふの罪通しそも此ふ句と
 △前句 去園ひろく火神 ちうむる
附句 痛衣のぬきひたの嘆いそ

かくてけそ花の命源より韻とたふりゆ新すて
 祝言哀傷の儀式よりとあむ自れ作者よ各儀の
 花とらむむらうとも事此始終あれんきとひ
 各句よ花あり様ありとも各儀の花んをこま
 てもしそれとそとそ二所の能潜とりひまして
 二句の二折あるとけ例へんかもあるとむけな
 り今世あまきるふとあむ痛衣とあつて
 とあつて花の二句とふりけれ例の罪とも通し
 △各句 花よあつて胡蝶やまの魂まつ
白花 花よあつて胡蝶とむれきよあむ

け設を越の井波より言はらるる付余をえひ十余書
 のて名をあけて一むくよと魂をまらねる美神
 此百韻より何りされの言向らと徳をまらねるはさく
 秋のむれい句花よりりてい言はれ胡蝶たれて
 てけ花の客とををれい後の花を全くまらねる
 一とまれの花より胡蝶と二句一この格と似ある
 さらさら花の洞とかりてけ花をいむるまれの
 胡蝶の花は可なりある客の花はる可なり秋と
 まらねれ差ふとるる一とまに之いけ式の外は
 彼より例万格よりてけかの指合去嫌と

よむ射の用とんやあくくおけ設よりりまら
 可く方と例の再々通ちるるなり

○月に日といふ事

むよりり連詠に月と百韻よ八あれい
 くよりりあふりて不案此何はしお月る一と
 よりのといひ言しよ天象の言嫌と目よら
 自らいけよ月次は次の詞より作者は
 七守儀も時とあれんらよとを言よのそと
 可言附の向とて伏とて言よあふねれ

先格の句とあけて當時の設とあしむむは
多し月座よりなりぬる隠見の句は
あり

○ 青園とあるもの種の交遷

小より秋也 凡そなるなり

け青園とせしはして故およむる名の設あり
是れより秋の七句同より例の月秋と断れり
け雲まの秋季ともきり十六七の青園より
唯今此月の附かくれり爰より種の感天とせり
秋と向置とのえとまきし時の念報せされ
青園の打越し月のあらしの林むむ川かく

はをくし十句同より月とてなるといふ秋季は
やうへく花月の月とて念あると定み隠見
の句はとあらむて

○ 八月と旅ありしるまき小幡錦

こふ句をば中秋の名よりせりはかたのては
月のまをあるとてむむるや初よりおと青園
の秋と唯今の月とて而氣を言せり月とて子
よ古れとせらるるまきといふは二も二月の定れ
といひ近くる書座の妙用とてしるまきとては
世等の設とねる例の交遷あると我らの

かたはし執るは佛あはし二月八月の假名よ
かればし月とらふ字は次々とおそれしは次と
音訓の議論あり今より名向のみりし月と
音よはと一一人の月と訓の唱の語勢は
空天のひきまふしと我にれしと音訓の好問し
よとては次と名向の次とてし月と名向の
評論あり古おと名向の名とあげしと秋
ありしとらひは月と名向の論をそれて
そと秋とて月と名向の名向服中とてし
ける名向ある時とてし名向の秋とてし名向の

月と名向の字とてし名向とてしとこれと
例の時ありし我に従ふの議論をまゝ今とて
故名の是非也

△母と名向と名向の子の月日也

名向向を貫た合謀とて母のめとてし名向
の名よとてしと晩年よけいと名向の
此書にはねとてしおの子あれしと名向
ありしとてしと名向の議論は名向と今とてし
ふしけしと名向のあはれしと名向の
てしと月と名向のあはれしと名向の例と

かゝる時今附方とて決め可し月と云ふは
 しませと云ふ今附方とて決め可し月と云ふは
 お向し月と云ふは可し月と云ふは可し月と云ふは
 と平竟と例の可し月と云ふは可し月と云ふは
 月と云ふは可し月と云ふは可し月と云ふは
 前向し月と云ふは可し月と云ふは

掃地。せほしりお化められお

△
 あらふおせきらとてさあはら
 と青月の月せ各とてくれあ

はれお向しりりかくる月をよし、越向と云ふ
 となすともさへお向せ給ふと月と云ふは
 入るもせも或らお向しりりかくる月と云ふは
 越向と云ふ時と

△
 踏こけておらるる月と云ふは
 月と云ふは

け月と云ふは、お向しりりかくる月と云ふは、
 一解や波りよお向の全解と月と云ふは、
 向けよらへとも、廉の男おらると、お向しりりかくる
 下とのう書向の越向あらしめ、端の古語と

かりて次の月と云ふはけり多にけり此附さ
の婦と云ふ人とはたふらん此の端也秋
の月此月と云ふは此裁入あり月
と云ふこと婦と云ふは此裁入あり月
二句の向はらうと入る附さの元法を移す
る次は月と云ふ句はわらわと云ふ

ちらくと書は婦と云ふ是此裁

未此はありと云ふの元人

年とれは氣の短さよ秋あり

素性の言へばと云ふは月

さうや彼と云ふは月と月次此の指令と云ふを
婦とのとらわれしは早に指令と類向と指令と
と云ふと句作は常用とありよと二平の内折あり
てきとひつひかくるはめとわらわと云ふは附合
ありと云ふにける此称もるあらむと素性の月
よと云ふるはめと云ふは呼あれはお分付との用と
ありて早竟と云ふは敵對して句格前の一字
と云ふと云ふはめと云ふは對の格は似てお分付との
と云ふと云ふはめと云ふは對の格は似てお分付との
素性の言へばと云ふは月

家より不齊句服中なるべき形の表合やられぬ
 朝日の服へのそとて月ををむつてくすか
 下字をいかに指あふはらるる一方向表より
 まく月と二ほをいきてあけぬい後に婦捨の
 名をつりて月の伴とあくるやらるや高野
 と花といひ文科と月といふも又近く月花
 あつとていふもいふてあ句と回毎と又所
 きる山田の形容と称をくんやまをうり所
 といふ高野といひ文科といひて月花と記を
 論ふたれとあふたつとてうつてぬとに作る

の眼力と云ふもやいふ月とあつとて

起るまふしかく 清後川

おのこひの北並北 夕景

△ 及後をとをもをみらるる

まといひと山と片^キ答くは月

け接おを越めと園よりは後川^{ミツキ}の二表と制りて
 おと北はやう北たふかけきるまの所の表
 ありまうれいけ表いけれと北あふ解りて
 みる月をおあく月^{ミツキ}あるよたふとけきる
 飾ふまししけ表ふ花とちて月とあつと

論より或を祝言會といひ或を哀傷席といふ時をおひむねふ近の各句あれ各残のなとし宗近よりむすやまくれの各句もはねあしきと花をあしふたれ或を一所の老人の或を親族の功者よりむす一はらをと一まの始終と泪ありそむまると今此能席よりと各句を可下此場おとおわしてあまこと我も事をも人しと花をまはらまると果たる各句もむひたれはらると一所の能潜よくも亦の論より及りといふ一はしや保木の能潜といふ

ハ能事と一所のとりより一各家の之句ハ能事と也一ハ世の名と事とハ能事といふ事とハ略美と一ハ論より及りといふれハ祝言哀傷の各句ハ祝言哀傷の名残のむとむより所用のむねあれハ各句ハ各句の服よりかりとむと花の用とともあれハも亦或を貴高客を新一ハ時よりむと一所の能潜より各句をそむ此能潜より各残のむとよのほれあしむと各句ハ一所のそむあれはら一ハ各句の附といふあしむとあはると一合りむ書事とあり一と一能園旅月守家の

時宜よりまをある年湖南北新書よりある

^{各句}七浦やて子のむと一子ゆ

△ ^{各句}西原の剛毛よりつれハ糸

されいも時世評論よけ各句とけい夏談
るやいなら新行の式とあるる所と雜の
各句よし他ふくくさくさ當季此服とけ
て四季格とよりくまふともの服と
算くはくわらうく各殊のむくくりて
各句のちくく支配とくまふはねと例の
よのほねの教むありきはれと各句此家評

ふけをえのほねあふねよ各句と一梅のら
あふくくく西原のて子とあり七浦のあら
とけらくく空家の二よれくく西原算の各句
とかけらとせけおよ各句の事とくまふく
と夏通ふくく用可く用のさおふくく

△ 他諸と今人偏のむけら

面白頬白目白はえは

○ 隣アキまくくをくぬとはれて果て

二扉凡のたよるゆり茶子盆

け二連とる用とてし自や前と新陳二百弱

古矢竹のあゝそいありて竹の反節のそよ白あり
はらら我家のむねときし人偏の能諧こそ面白
かれといふことを目白頼の拍子よかけたる多
一ちて此用ありといふゆゑ後を彼より定信集
に變化の中此曲節よりして各残の花より此
これいふよふのほねの附合とめてあゝめ
ぬと因るとされぬ此の二をよみ用なりといふ
とこれいふ事より千變ふく證さるるを深く
事一今一此のそとを處とてくち中なれ
ても此用ありいふ事とてありていふあり

○ 當季よ物名此事

古抄に言ふ此屏風といひ牡丹の市並とてこれ
とらあやなくも季よ用これとてくちの季
にあるももゆり扇と各といひ桐の向といふ
と論ふも難く用て當季よといふかたも季
ある一季新とて此志ゆりあれ也

△ 附句
白雪の玉此夏落とよよ居て
折かゝと梅中宿のほき信

前の夏落とて此の句也これとてはよ玉夏落

く各句せそ此顛倒の用とすよと音韻格といひ
 珀石榴枝とすん粒と枝といふるい用句多を
 りて顛倒の比とめらゆきとぬく錯綜顛倒
 もあれとす所及とありとみせとるを
 杜律の諸おし錯綜顛倒の比といひて
 の細浪とるさるを覚半句に接とるし格
 の懸辭の比といふもや專も鈴も松也といひ
 結語と宝此一文字とありとて代と法所の七月
 とるら一と爰とらむ文代も句格もあつて
 とこのむいふあつてと句と字此用也用あれ
 新奇

いぎつねとすのよ(ま)は格の用とすそのい(お)とる
 一とる句作の可し用とるん流とるお(物)の
 あつてい(一)句作のま(何)とて(一)とる

○ 二文字と語此事

むしうらりてとる字と語の格と和漢と語をたね
 あれと所合しけ格と用ゆら(お)とる能格と格
 とち(お)とる(お)とるの能格とすつたれい

○ 藤北欄本と 藤とちつたれい

花のちつたれい

ついでに「御」も「く」も「わ」とも「語」の格と「や」も「む」
され「け」比の「能」集「け」格と「や」ある「あ」も「く」或ん
「併」句「り」も「句」も「る」も「さ」も「る」あり「附」合と「た」ね
「附」り「た」あ「く」も「句」も「り」併「句」も「る」も「む」——「語」語
の「拍」子「く」ら「ひ」あ「れ」也「は」れ「く」も「さ」の「句」也「く」ら「ひ」
お「句」と「あ」あ「く」も「る」射「と」も「併」の「論」も「及」び「さ」ん
け「格」と「た」あ「く」も「る」併「合」も「く」——

○ 越向一し句作之此事

中右を連誦の各句も附句も越向と句作と此

差ふふたれに教ゆらんも「併」あ「ま」く「ら」あ「く」も「さ」も
者しを「調」え「や」も「く」も「け」ぬ「く」我「行」も「越」向と「さ」る
し「執」中「法」あり「て」越「向」と「せ」す「く」——「く」體と「は」く
也「打」越「く」り「二」ら「る」也「変」と「ん」あ「つ」也「句」作と「ね
く」——「て」用と「竅」ひ「お」句の「法」也「信」と「も」さ「む
く」と「さ」も「併」句と「附」句と「よ」ら「く」も「あ」く「も」効「念
の」控「也」ら「る」白「馬」の「類」説「く」ら「く」て「曲」節「地」の「之」様
也
各句句曲
幸「崎」の「ね」も「む」も「り」勝「く」
才之句節
幸「崎」の「ね」も「ま」の「お」勝「く」
手句句地
幸「崎」此「ね」と「ま」の「お」も「勝」て

けあつと湖南の春らふりて白馬と一條の秘訓也
ある時本層寺に夜話しぬるを君子の難談集
と評して彼ら幸崎の松此論談と云れいふと哉と
の通用とありてあるあるぬの池文と云されたる
い評林の返答書よりして此非味新の事と似たり
と云らるるはと評もして此らのさねのむと云たり
七幸崎の事を概しり面白くんと云と云て哉と
と味と云と云と疑下りきと云これの類説と云り月
ハ日月のりん誠と云と未味の中此味辭あるもや
むより松と云味と云る時と和音と云偏と云いしる

ト一さねのむと云此益國よりや幸崎の松と
おの和音よりおくれいさといふもとゆれなそ
と曲節あるおと者句とあるト一そりけふ之様
と口評あると云と云れいおのむかぐめと云
附るとありて戸様ありや一語向と例の只一より
自作と曲節地の之様より或と真竹行といふ
或と不易流りといふ名目と千次方客あり
と此ある人此不堅とあるひて一屋第の家の益
と評と云と云服と云之を能と云やと云
にとのく評の字此節ふとれい例の難論と云入

ふらふら向作と秋此扱扱あらんうら

^曲あ入め子に大右此秋咲て

△^節あ入め子に隣々秋咲て

^地あ入の地をうらの秋咲て

かく之様の向と作りて二所の家評とる如ふに

お月くを隣の秋とと移しけりぬらぬらうら大右

秋もく之れけりを二所此能潜あれを奇言

新語と好むまきよあもとる中と門の秋

まきくわらぬらうらも厚此夜話とおしめて我

秋の之様と事とりにあ入の地をく秋も起

てと作し前のなるよはらうてすゆ一々れ起

の備と地と曲とよはまされて奇怪と教ふる所

まきんうらへの秋と中合ふる例の二所とる

人あいなやあはらうら耳同とあはらうら

いあふ此夜話と失つとるまきくひ同とまら

可しひくまきくまはれの人うてはれと言ふに

俗語事話とまきとる白馬の遺訓とむ

ららんはまらるる一能潜の世はあれ人よ

藝^{ケハレ}の用とあはらうて藝^{ケハレ}とて負服とてまき

いあはらうらとあはらうら節あはらうら子論子

高し此功者一家を打く

親の位牌も存せ表見世

されは古来の對附とつら老木のみ此極と
し中子に孩の禮と附くると子對といひ
對といひ後も辭句の根則あれ今子親と
子に對し何の高しの表^{ラモミセ}店も存せ此極の面側^{ラモミセ}
と對して全くあらはれぬれい詞い對とい
ふくを例のなることといふもこれ未練の
事此事といひからの言あしんしとを曲節此
秘授とつらつ^{ラモミセ}古来の對附と今子親

製の對附と併し似ねたのまきれとおさる一
所^{ラモミセ}附方の八種とつら人らあはれも後を
衣食合負福の不をとてけてまるなり有心の
附方とつらつ^{ラモミセ}も場とあはれ夷洛山海より
家内とあかめをといとてけておぬく今年
の附方とつらつ^{ラモミセ}一町分とと晦朝を夜より
晴の附方とつらつ^{ラモミセ}町分ととまはる秋文より
節供正月の行事とつらつ^{ラモミセ}二種とま用み
或は有心の附合もあるつらつ^{ラモミセ}今年秋の附合
もあつらつ^{ラモミセ}に時直の二種とつらつ^{ラモミセ}の時

ひこましく目とぬまきいひひまきくにぬまきいひまきの
浮いころ中しん所着此辨ふれい人よ教るよる
一丁例のふ式よるまかき一きまきい

障子よるぬのタ日ちりてく

△ 智算殿とこれまきい老の目と接い

け白に二層の夏神と意よよあるよるぬのこまきと
活まきいそまきいタ日のうみろひより障子に木竹の
ぬれよるゆらりと所白と打撃の座かとりよるぬの
智算殿と我白此作とやいむとまきいしけぬの
こまきいよるまきいおきて人のま取くぬれよるぬの

智算のいん巻とつよまきいよる格まきいぬの附合
い起佐のあまきいしぬまきいまに目とぬまきい
智算北るゆらりと作とぬのちりてくまきい老
の月ぬまきいとまきいおきてぬのまきいぬの
まきい早まきいと中しん所着うして下ゆまきい
離附の二変より空接のけ白いひまきいとまきい
おきて我家の今式よるまきいと附方此まきいおきて
一たの附合よるまきいと時と下りて打撃よりまきい
まきいとまきい合七次よる折のまきいとまきい次よる
白此まきいと附合よるまきいと配とまきいと一かきい

将とあましく思ふなり多きを有心の金銀の銀を
道場の遣りゆくとし七名の當用とあるは其の
も始とある方よりけりけりし時分の定まりてね
よ其の人其場の所不とまり天相の銀の銀向
とありてきりおむ此用と作る故よ其の附方と
いつり志うれい東の方と附方とを程とさし先
事ありてし事と口し附方故よ志りてし事
ふあれし二名一附とまりし事也但し其の
その不附しけり空控し古法の大さし銀と
おし御向を今に新製なれは其の附方

のそむ時をか多しと家海ゆ多介よりか
自己の五元とさしゆくもせ

○懐中より各目其事

おし連能の二中とてしより百約と教の事あり
てけきとけりおれは千向とてひ百中とけり
ひ万向とて十百約と千の北差ふと一附し
のちひひとて志婦の用捨あるおせは百約ハ
の折りてお折を表とひるとおしを裏と十
向とて二の折を表と裏とあはく十向と

その例のりも倍習あり、終まに祝言のひしきも
いりむ、新儀を各同の風儀あり、あると十八番の
歌合よりを此後人と奇儀とて、了らぬ多と、下
の句とあり、て、二十六の各とあり、なり、
月花も二折の式あれと、百十二句とせり、これ
今式より二花二月の例あり、中式の遺訓も
元儀より一、元儀と二、元の時宜あり、或は納
の儀と祝、或は歳暮、歳旦の賀、よ、如教と
そ、あつる、さ、や、さ、ら、と、う、く、り、い、は、こ、り、し、ま、と、業、此
そ、尾と合、より、月花の二折を、此、換、お、し、り、

右より、さ、ら、お、ん、え、格、より、一、或、を、一、折、より、や、む、時、
あれ、し、ら、く、を、公、式、の、論、よ、あ、り、も、も、て、お、て、く、此、を
と、ま、れ、と、せ、但、つ、む、長、短、の、二、行、を、故、儀、減、後
の、新、制、製、より、一、才、丁、を、求、初、の、用、お、く、短、音、よ
へ、時、旦、の、音、用、あり、求、初、の、下、に、さ、り、

○ 求初の能誦よ句教此事

多、よ、能、誦、の、求、初、より、や、を、加、此、儀、後、抄、の、例、を
かり、和、奇、此、初、は、一、教、了、り、や、あ、り、れ、も、け、武
故、儀、の、中、三、前、よ、例、は、あり、一、武、の、素、を、是、素

あしき處に遺集の命をとりねて蓮社の六音に
 を催されしと瓦蘭々かほらるるしより北の事
 ありてやこわらそ我をそれよりよふに求約の事
 は能潜の世による用あつても論を好事の所は
 しゆられし和音連歌の中しらひは後和とい
 求約といひまひてあるを餘力をねへと減ぬの
 行生をとをけはめてあかめ求約の事と云ふ
 二詩を絶句より律詩まで假名の二韻を用ゆ
 一々れし歌行類を中篇よりまをるる換約の格
 あねの約す子よりて自由あつてもけねし今式

ハ長歌行といひ短歌行といふ二名の名目と新製
 源氏行と平仙行といふなり古式の名目なり行
 のて子を候らるる韻と行^{ツラ}なることより歌行類
 一ありハ名但つらむ長音短音とて平仙の流
 に名とありて古例よりれりといふも也あるに
 求約の能潜をけりやとてつらむれりて換約の開
 了六々の時を二約四子よりハ々の時を二約四子
 同約を但一約とるなりて同約と異字の兼細の
 差ふより一これらと和漢の旧例よりて細は
 求約の序説とあり和漢文操よる心知よるなり

されい今より長歌行を全く東を式の新製
あるう才一と撰約の増うして百約も又十約
一約十句のよハ字と用ひい假名とすまうて
不自在なうんやうして七々々と令かくまれと
今此ハ々と今ゆるせ才テと連えのなれ取と
一と一折の能活あんとつらとと身元の古たれ
とハ々の人おまふハの長歌と用ある一と表ハ
ハのうと兼と十六句と一折と一と四十分
あれハ式目ハもあうと又十約ハうくも月座
と例のせる目あれと花座を但十又目也

もかんと古ハよかりるうか一例と短歌行を長歌
と對する変教あり表と四句と一と兼とハの
と一の折れ表とハのうと兼と例の四句也
け教と四六九字と一と先と撰約の用あう短
うんこふよ財と一折あうんこり物と始終を
とてあむるせとと我門の音息式と二七
の者はとあれハ月花の設と勿論と善秋
交々めの去嫌ととる去此省略ある(ま)とや
係中行ととい音息行ととい中より六と此古た
あれと係中と求約のせるとん財を長歌の

六ハと用やしく身位と短音と末節の程と字
（まも）右の心字をと末節の和ぬきとあつた
まれの和漢の通角よりて能階の字同よは
さしと也

○同字のよむ可きまや此事

むよりおほの能階も同字をみるま此字は
あれとみるはしくおとみるはつてなるはく和
いなるはる（まも）今此能階の者はよま秋いなる
はるよまよりなるまもと一なるはるはるま
のまも節のまもまも例のまもとこれより末節

のまもまもよりなるまもと一連音の程とつはよま
あつたまもよりなるまもと一連音の程とつはよま
はつたまもよのまもまも今より音位と短音とを
月花のまもまもつとまもより月花のまもまも
まもまもを今まもまもまもまもと宗神の比
此節をまも例よひまもつとぬきと例のまも
ゆつたまもまもまもまも今短音行の二花二
い論よ及つとまもまもまもまもまもまも
よりなるまもまもまもまもまもまもまも
まもよりて同字をまもまもまもまもまもまも

古今抄

四二

けられ翁の服才にまてらとてたし著をて用
 とつひおねの配し言ふたれは昔秋と云うて
 まてくるは冬を云うて二つとて一月花の配り
 て昔秋とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 と昔秋とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 とおとこつひにけつらおねの配し言ふたれ
 ま秋の二つとてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 されと夏涼のた駿しつひにけつらおねの配し言ふたれ
 冬代とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 各段の裏せむ月とてつひにけつらおねの配し言ふたれ

と昔秋とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 といふるあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 といふるあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 の者はあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 例のあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 といふるあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 自在とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 おもく秋の葉を式とてつひにけつらおねの配し言ふたれ
 同季といふるあつねつひにけつらおねの配し言ふたれ
 條とてつひにけつらおねの配し言ふたれ

話より、或は雨夜の密談より、遺行のば
 く、とあるが、今、その例とありて、百世の
 傳へんとする、とて、明に、その旨の、遺行は
 して、東鑑西鑑の日用と、さくらして、當時
 への、者の、授論と、密に、て、永く、傳へ、と、傳へ
 る、と、て、その、弟子、此、仕、ち、り、て、さ、れ、と、て、傳へ
 る、と、て、その、識、と、あ、る、も、例、の、二、以、貫、と、て、傳へ
 る、と、て、その、授、論、の、沙、り、と、も、て、千、亦、一、万、の、的、と、て、傳へ
 る、と、て、その、名、を、多、く、す、用、と、さ、り、て、さ、る、名、を、例、の
 有用と、傳へ、と、て、さ、る、と、て、一、刀、兩、断、の、場、ち、り、と、傳へ

此、と、て、下、し、け、一、冊、と、お、目、く、と、お、傳、へ、の、こ、と、お、り
 一、冊、に、一、例、の、沙、り、と、あ、れ、と、お、り、し、と、自、己、此
 互、に、あ、る、と、て、彼、の、授、論、の、旨、と、お、り、し、と、
 例、と、一、冊、の、密、談、と、り、一、世、の、密、談、と、り、し、と、
 用、授、と、り、一、百、世、の、密、談、と、り、し、と、お、り、し、と、
 事、也

東鑑式目之五終

能清在と抄

跋

渡部紀

いふ一へ孔子の家語し子夏向れ孔子曰顔回
之為人^{トイカン}賢君子曰回之信^{トイカン}見於丘^{トイカン}乃至
子路之為人^{トイカン}賢君子曰由之勇^{トイカン}見於丘^{トイカン}
子夏敬進而向曰然則四子何為事^{トイカン}先生^{トイカン}
子曰回能信而不能^{トイカン}及^{トイカン}乃至由能勇而不能^{トイカン}
怯^{トイカン}勇^{トイカン}四子者之有以易^{トイカン}吾弗與也此其所^{トイカン}
以事^{トイカン}吾也云と云れへ子路も顔回も孔子に及ぶ

不と真言と云々の迂詐をばまゝ勇あると云へ
憶病ありて終り孔子と云る子あつて是れ
と瞻前忽後と讚して顔回ひとりよく
知れとも惜哉不幸短命ありて孔子の死と
傳りともとつ子路もあつて今此能清と云ふ
亦曰楚夫余漢のむらり二千余歳の事也
と評するもよく可なりとく断むと云ふ所
断すともさうと人向の常性^{トイカン}の虚しくいふ實と
とちて虚實のちやうとよ速しある一と云ふ
武陵の芭蕉翁を授子一碗の茶と云ふはち

104-34311

104

て能潜の虚實し自在とゆふは能信をねと
し信をきとせよと能勇をねと勇ふたふと
きと人の孩児の親とまてふとてくも徒とす
人とてふ弟子七十とてつとてあてけり
日本より余舟とて名を移とてし子不
其れきと性の人とあふて人の及ぶとあれ
ある一しはて能潜を俗談更説うてねの及ぶ
不いむとてふ人きと俗談の中とあふね
更説うて凡雅あふと凡雅あふと教をね
尼入るの耳と遠しとらとて七の句はありて

或と長く或と短くをそれ自由あふはる
より人の心は痛とありてとめれをゆふ
とて余の耳とて他ねとてきと白馬の
誠むるありてとる者とてに能潜とて
まねねとてに能潜とてとて雅とて俗と
俗とて雅とて常ある人とてとてか
大なる事とて能潜地尾の二語とて雅俗
一樣の優言あるとて人の及ぶとあふと
けぬとて或と人の及ぶとあけて近く
の象源より遠く一世の象談を窺ひて

更入百世此の世と侍りてあり

享保 庚戌之月日



書目林

京寺町二條

野田治兵衛

